

トピックス

総長候補者に鷺田清一理事・副学長を選出 第2回大阪大学ホームカミングデイ開催

クローズアップ

職員の自己啓発のための休職制度を活用して
—私は阪大で学ぶ、阪大職員です—

ナウスベシャル

ストップ! ザ・構内の交通事故



2007 6月号 No. 97

目 次

トピックス	2
クローズアップ	4
役員室だより	6
ナウスPECIAL	16
キャンパスニュース	18
記念講義	31
表 彰 等	34
人 事	37
名誉教授リレー随想	38
討 報	40
インフォメーション	42
インタビュー	48
海外レポート	50
交流協定大学紹介	54
クラブ&サークル紹介	55
キャンパスアクティビティ	56



表紙写真：中之島センター
佐治敬三メモリアルホール
ロビーの型板ガラス
撮 影：安全衛生管理部教授 山本 仁
表紙デザイン：株式会社ココティエ

総長候補者に鷺田清一理事

6月4日(月)、コンベンションセンターにおいて、総長選考第2次意向投票及び総長選考会議が行われ、宮原秀夫総長の後任となる総長候補者に鷺田清一理事・副学長が選出されました。

任期は、平成19年8月26日から平成23年8月25日までの4年間です。



第2回大阪大学ホームカミン



・副学長を選出



鷲田清一（わしだ・きよかず） 昭和24年9月2日生（57歳）
（略歴）

昭和47年3月 京都大学文学部哲学科卒業
49年3月 同 大学院文学研究科修士課程哲学専攻修了
52年3月 同 博士課程哲学専攻単位取得退学
53年4月 関西大学文学部専任講師
56年4月 同 助教授
63年4月 同 教授
平成4年4月 大阪大学文学部助教授
8年4月 同 教授
15年8月 同 大学院文学研究科長・文学部長
16年4月 同 理事・副学長
（専門分野） （臨床）哲学、倫理学



6月4日の記者会見の様子 左：宮原秀夫総長
中：松岡 博総長選考会議議長

関連記事は、30ページをご覧ください。

グデイ開催

4月30日(土)、本学豊中キャンパスにおいて、「第2回大阪大学ホームカミングデイ」が開催されました。

昨年からいちょう祭に合わせて開催しているホームカミングデイには、今年も200名を超える卒業生や教職員OBが参加し、旧交を温め合いました。



詳細は、キャンパスニュース（26ページ）・同窓会連合会ホームページをご覧ください。

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/dousoukai/top.html>

「職員の自己啓発のための休職制度を活用して」

— 私は阪大で学ぶ、阪大職員です —

総務部人事課（大学院法学研究科博士前期課程2年）

中 谷 伸 二



本学では、「職員の自己啓発のための休職制度」を平成17年11月に導入しました。
この制度を、初めて活用し、実際に自己啓発活動を行っている事務職員を紹介します。

■ 自己啓発休職って？

大阪大学では、昨年4月以降「職員の自己啓発活動等支援のための休職制度」が試行的に実施されており、私は、この制度を初めて活用している職員です。

自己啓発休職といっても、なじみのある方はまだ少ないかもしれません。「本学の職員が自主的に自己啓発のための活動を行い、より高い使命感と働きがいをもってその職務を遂行することができるよう、大学院への進学や海外留学等の自己啓発活動に関して、大学が試行的に実施している休職制度」。それが自己啓発休職制度です。

■ 休職にいたるまで 一巡り合ったチャンスー

私の「自己啓発活動」は、本学の大学院法学研究科博士前期課程において労働法に関する専門的知識の習得です。

法人化前後というドラスティックな変動期を人事課職員として経験した私は、「国立大学が国家公務員法等の従来 の枠組みから外れ、民間企業と同じ労働法等が適用される ことになり、今後は法人として主体的に人事労務制度を企画・実行していかなければならなくなった」ということを、一職員として身をもって実感しました。



小高教授のゼミナールの様子



普段勉強している法・経大学院総合研究棟

それと同時に、人事労務業務を担当する職員として「労働法等に関する専門的な知識や考え方について体系的に学びたい」と強く思うようにもなりました。そんな折にこの休職制度のことを知りました。また、その勉学の場合は、自身の職場でもある大阪大学において他にはないと思い、本学法学研究科博士前期課程（社会人選抜）の学生募集に応募したところ、運よく入学試験にも合格し、休職制度を活用することを初めて認めてもらうことができました。

■ 学生生活 一新鮮な経験の連続ー

事務職員から大学院生になることは、私にとって新鮮な経験の連続でした。

大学の職員として勤務していながらも、先生方や学生さんたちと接することが少なかった私にとって、そのような方々と直接議論することができるようになったのは、何よりの財産といえます。また、大学の使命が教育と研究にあることも、大学院生になって改めて痛感しました。

第一線で活躍しておられる研究者や実務家の先生方、高い向上心を持って学びにきている各国からの留学生、そして自身のキャリアアップのために大学で学んでいる社会人

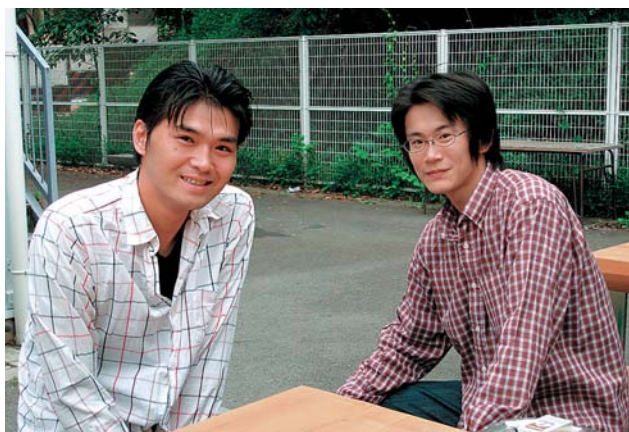
学生等々…。講義中に議論を交わすことはもちろん、私的な場における交流も少なくなく、様々な人々の様々な考え方に触れることにより、視野を大きく持つことの大切さを日々実感しています。

また、与えられた仕事をこなすという受け身の立場ではなく、主体的に課題を設定して研究を深めていくという作業は、想像以上に大変であるを感じながらも、大学院生という「研究者」のはしくれとして、自分自身との悪戦苦闘の日々を送っています。

2年生になった現在は、研究活動の集大成として修士論文を執筆することが当面の課題であり、不安や焦りはあるものの、残された学生生活を有意義なものとするためにも、「せっかく得た機会なのだから、精一杯研究活動に取り組もう！」と前向きに考えています。

■ ある1日の生活

7:00	9:00	12:00	13:00	16:00	18:00	20:30	24:00
起床・通学	図書館で資料収集	学食で昼食	修士論文の研究	ゼミ・演習	友人と買い物・夕食	予習・レポート作成	入浴・就寝



本制度を活用している知財法専攻の板村健司君（人事課）と

【参考】自己啓発のための休職等の試行的実施に関する要項
（学内専用 HP に掲載していますのでご参照下さい。）

■ 大学職員としてどう活かすか

前述したとおり、これからの国立大学法人の職員には、主体的に大学経営に関わる意識や責任感、高度な専門的知識や業務遂行能力など、様々なものが求められます。

私も、そのような大学職員の一員として少しでも大学に貢献できるように、そして何よりも自分の仕事に誇りとやりがいを持てるように、自らに与えられた機会を存分に活かしたいと思っています。「国立大学法人と労働法との関係」という自身の研究テーマについても、どれだけ掘り下げて研究できるかが今の私の課題です。

■ 最後に

キャンパスを歩いていると、知り合いの職員にバッタリ出会い、「あれ？中谷君、仕事サボって、私服で何してるの？」と聞かれることがしばしばあります。自己啓発休職制度は、現在のところ試行段階ということもあって、まだまだ職員の中に深く浸透しているとはいえません。

私の拙い文章では、この制度の魅力を十分に伝えることができず残念ですが、こうした制度があることを少しでも多くの職員に知っていただき、「私も自己啓発休職を利用してみようかな」と興味を持っていただければ幸いです。

【指導教員から】

大学院高等司法研究科
法務専攻
小島典明 教授



法人化をきっかけに、私も教員と職員がお互いに協力することの大切さを知りました。あの分厚い就業規則も、こうした協力関係のもとで初めてできたものです。人事労務室に所属する教員にとって、現場を知る人事課の職員は「教師」でもあります。そうした職員を昨年から法学研究科では学生として受け入れているわけですが、中谷君のように、矜持を持ってこの制度を活用し、大学のために貢献しようとする職員が輩出することを祈ってやみません。

役員室だより

2007.6 Vol.18

5月から6月にかけてのこの時期は、前年度の業務実績報告書の取りまとめと次年度概算要求に向けた取りまとめ作業に入っています。

業務実績については、過去2年度にわたり高い評価を得てきたところですが、特に今回は、来年度に予定されている第1期中期目標期間における「暫定評価」に大きく影響することから、各部局はもちろん全学的な実績についてもしっかりとアピールする必要がある、細かい表現にまで細心の注意を払って取りまとめにあたっています。

概算要求に向けても、文部科学省との折衝等も踏まえつつ、全学的な観点から要求事項を精選しているところであります。現執行部の任期は残り少なくなりましたが、本学の着実な発展のために最後まで全力で取り組んでまいります。

各室の検討状況

総合計画室

設備整備計画検討ワーキング

昨年度の概算要求で提出した平成19年度・設備整備に関するマスタープランを踏まえて、本ワーキングでは研究推進室や科学教育機器リノベーションセンターとも連携して、平成20年度マスタープランを策定中です。今回策定するマスタープランには、今期のみならず、次期中期計画期間以降の設備更新計画についても記載することが求められています。

なお、平成20年度概算要求からは、特別教育研究経費の中に「設備マスタープラン枠（仮称）」が新たに設けられることになりました。

「女性研究者支援モデル育成」事業

大阪大学多様な人材活用推進委員会では、平成18年4月より「大阪大学における多様な人材活用推進に関する基本理念」を定め、「社会的諸要因によって潜在能力の最大限の発揮を阻まれている、女性をはじめとする多様な人材を積極的に活用・開発することにより、研究・教育の質を高めること」をめざし、保育所の整備・拡充など具体的な取り組みを開始しています。

その取り組みのひとつとして、平成19年度科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」プログラムに本学の提案課題である「次世代に繋ぐ女性研究者サポート連鎖」が採択され、平成19年度から平成21年度の3年間、文部科学省の委託により、女性研究者を支援するための新たな施策を実行することとなりました。おもな取り組みと目標は、以下の通りです。

(1) 「研究支援員制度」の実施

研究支援人材バンクを作り、育児・介護等で研究継続が困難となっている女性研究者の研究面での支援を行うため、同じ研究分野の院修了者や学生を「支援研究者」「研究補助員」として雇用・派遣します。これは同時に、支援する院修了者や学生に対しても、ロールモデルと接することによりキャリア形成を促すものであり、次世代の研究者の育成に繋いでいくことをめざしています。

(2) 「女性研究者キャリア・デザインラボ」の設置

本プログラムの実施部署として、研究支援員制度の運用およびコーディネートを行います。また、女性キャリアに関する地域連携型学際的研究を推進し、シンポジウムの開催、学生に対する講義やセミナーの提供、女性研究者ネットワークの構築による情報や問題の共有化などを行います。

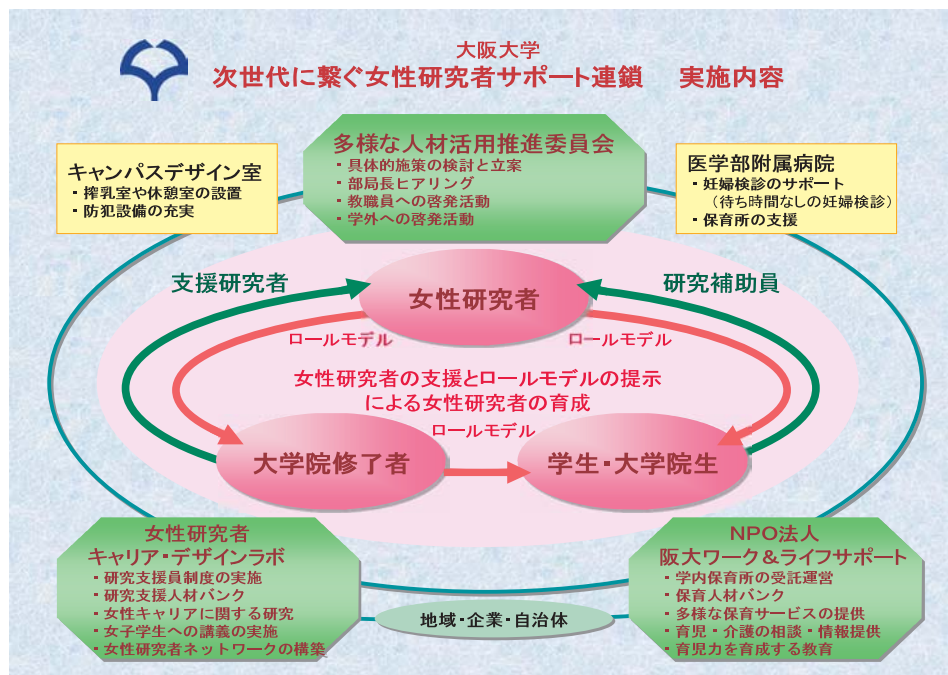
(3) 生活面の支援

「NPO 法人阪大ワーク&ライフサポート」を設置し、受託運営する保育所の保育定員の200%の増加と就学までの年齢引き上げを行います。また保育人材バンクによるきめ細かな保育サービスを提供するとともに、これらの活動を通じて親準備期の学生の育児力を育成する教育に繋いでいきます。さらに、医学部附属病院による妊婦検診や保育所支援、キャンパスデザイン室による女性に優しいキャンパス作りなど、多様なサポートを実施します。

(4) 数値目標

理工系部局における常勤女性研究者の人数を、3年以内に現在より3割増加させます。

このように、大阪大学やNPO法人が実施するさまざまなサポートの輪のなかで、本プログラムの女性研究者と次世代人材をともに育てるサポート連鎖を形成していくことにより、次世代に繋ぐキャンパスプランとして推進していきます。



湯川記念室運営委員会

ユネスコ湯川年 2007 を記念し、本記念室をはじめ関係部局の協力により 5 月に総合学術博物館で開催した企画展「素粒子の世界を拓く 湯川秀樹・朝永振一郎展」は、好評のうちに閉幕しました。

今後の実施事業として、昨年度に引き続き高校生を対象とした「Saturday Afternoon Physics —最先端の物理を高校生に—」や、一般市民を対象とした「湯川記念講演会」を計画しています。

・ Saturday Afternoon Physics —最先端の物理を高校生に—

日 時：10 月 20 日～11 月 24 日の毎土曜日 15：00～18：00

会 場：基礎工学部国際棟（シグマホール）

・ 第23回湯川記念講演会

日 時：10 月 6 日（土） 13：00～17：00

会 場：中之島センター 佐治敬三メモリアルホール

教育・情報室

平成19年度特色ある大学教育支援プログラム等の申請状況

平成19年度の大学教育支援プログラムの申請状況につきましては、現在、教育・情報室におけるヒアリング・選考のうえ、大阪大学としては下記の11件のプログラムに計21件申請しています（予定も含む。）。すでに4件の採択が決定しています。各部局からの積極的な取り組み申請に敬意を表します。

・「原子力人材育成プログラム」（補助金）	：申請3件（うち、採択1件・工学研究科）
・「原子力人材育成プログラム」（委託費）	：申請2件（うち、採択2件・工学研究科）
・「理数学生応援プロジェクト」（委託費）	：申請1件（うち、採択1件・理学研究科）
・「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」（大学改革推進等補助金）	：申請2件（審査中）
・「地域医療等社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム」（大学改革推進等補助金）	：申請2件（審査中）
・「がんプロフェッショナル養成プラン」（大学改革推進等補助金）	：申請1件（審査中）
・「大学院教育改革支援プログラム」（研究拠点形成費等補助金）	：申請6件（審査中）
・「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」（委託費）	：申請1件（審査中）
・「専門職大学院等教育推進プログラム」（大学改革推進等補助金）	：申請1件（審査中）
・「大学教育の国際化推進プログラム」（先端国際連携支援）	：申請1件（審査中）
・「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」（大学改革推進等補助金）	：申請1件（予定）

大阪大学大学院高度副プログラム

教育課程委員会では、「主専攻・副専攻に関するワーキング」を設置し、長らく「主専攻・副専攻」のあり方について検討を続けてきました。このたび「大阪大学大学院高度副プログラム」の名で原案を作成し、趣旨と目的、プログラム構成と修了要件、承認手続き、修了認定証の発行、管理・運営等についての取り決めをまとめるにいたりました。今後、全学の承認を得たうえで、各部局にご連絡申し上げるとともに、本欄で詳しく内容をご説明いたします。

本プログラムは、「大阪大学の大学院生に対して、専攻の教育プログラム（カリキュラム）に加えて、幅広い分野の素養を身につけるとともに、高度な専門性を獲得する機会を与え、また勉学意欲を喚起する」ために提供される高度な教育プログラムであり、現在、成績証明書に正式に記載できるようさらに検討を進めています。本ワーキングの最終的な検討課題は、「主専攻・副専攻」の学位の取り扱いに関することで、この課題につきましては引き続き本ワーキングで検討を続けていきます。

社会学連携の在り方検討ワーキングの設置

総合計画室での検討を経て、教育・情報室の下に、「社会学連携の在り方検討ワーキング」が6月に設けられました。大学の社会学連携事業は、企業との共同研究やベンチャー事業開発、インターンシップ支援を推進する「産学連携」と、市民を主たるパートナーとする「社会学連携」の事業との両輪で進むものです。「産学連携」については大阪大学はこれまできわめて積極的に取り組んでまいりましたが、「社会学連携」についてはこれまで、医学部附属病院とコミュニケーションデザイン・センター、さらには各部局によって個々に熱心に取り組まれるものの、大学としての体系的な取り組みのなかにそれらが位置づけられることはありませんでした。そこで大阪大学の「社会学連携」の在り方、その方向性について本格的な検討をおこなうべく、このたび「社会学連携の在り方検討ワーキング」を立ち上げたものです。10月の大阪外国語大学との統合を機に、大阪大学の「社会学連携」事業をさらに活性化すべく、総合計画室、評価・広報室なども連携しながら、秋に向けて集中的な議論を重ねていくことになります。

研究推進室

富国生命保険相互会社との連携推進協定締結

大阪大学と富国生命保険相互会社は、少子高齢化社会の到来を迎えるにあたり産学間の連携を通じて科学・技術力向上や人材育成に資することを目的として、平成19年4月24日に相互に協力可能な分野において具体的な協力を有機的に推進していくことに合意しました。本学と生命保険相互会社との連携協定の締結は今回が初めてです。（詳細は、「キャンパスニュース」（25ページ）に掲載しています。）

平成19年度科学研究費補助金の採択状況

本年度における科学研究費補助金の配分額は、全国3位となっています。

なお、上位7大学については以下のとおりです。

（金額単位：円）

機関名	採択件数	配分額	間接経費	合計
東京大学	2,797	16,475,580,000	3,159,600,000	19,635,180,000
京都大学	2,290	11,279,230,000	2,257,950,000	13,537,180,000
大阪大学	1,863	8,288,600,000	1,543,140,000	9,831,740,000
東北大学	1,932	8,029,670,000	1,640,700,000	9,670,370,000
名古屋大学	1,282	5,274,470,000	994,140,000	6,268,610,000
九州大学	1,443	4,893,090,000	1,001,040,000	5,894,130,000
北海道大学	1,395	4,810,127,675	1,029,390,000	5,839,517,675

科学技術振興調整費の採択状況

総合科学技術会議のイニシアティブの下、我が国の科学技術政策上の重要な課題を解決するために用いられるトップダウン型の競争的資金であり、本年度は以下の課題が現在までに研究代表機関として採択されました。

	プログラム名	提案課題
1	女性研究者支援モデル育成	「次世代に繋ぐ女性研究者サポート連鎖の形成」
2	先端融合領域イノベーション創出拠点の形成	「フォトニクス先端融合研究拠点」

グローバル COE プログラムに関するヒアリング

本年度から実施されるグローバル COE プログラムに関して本学からの申請 11 件（新規提案 4 件及び継続提案 7 件）に対し 9 件が文部科学省におけるヒアリング実施課題となったことから、その対策として学内ヒアリングを 5 月 1 日～5 月 22 日の期間に実施し、各拠点リーダーに助言を行いました。

世界トップレベル国際研究拠点形成促進プログラムに関するヒアリング

本年秋から実施される世界トップレベル国際研究拠点形成促進プログラムに関して申請希望のあった下記の拠点構想について学内ヒアリングを経て 5 月 28 日～29 日の間に申請しました。

拠 点 構 想 の 名 称	拠 点 構 想 責 任 者
国際素粒子基礎研究センター	理 学 研 究 科・久野良孝
大阪大学免疫学フロンティア研究センター	微生物病研究所・審良静男
極限ビームナノサイエンス国際研究拠点	産業科学研究所・川合知二

設備にかかる概算要求

平成 20 年度の設備にかかる概算要求事項について、要求設備と学内整備項目の区分け、年度毎の順位付け、各年度に整備すべき理由、学内整備分のリユースの方法等を検討しました。

ワーキンググループによるプロジェクトの推進

研究推進室の下に設置した生命科学・生命工学分野、ナノサイエンス・ナノテクノロジー分野、理工学分野、文系分野、文理融合分野の 5 つのワーキンググループでは、本学の中長期的研究戦略として、1) 部局横断型研究の推進、2) 第三期科学技術基本計画への対応、3) 文部科学省、JST 等を始めとする各種プロジェクト公募への対応等を視野に入れ活動を続けております。また、昨年度は、部局横断型の研究プロジェクト支援経費により 11 件のシンポジウムを開催しましたが、本年度においても同様の支援を行うこととしています。

評価・広報室

18 年度業務実績報告書の作成と提出

教育、研究、社会貢献、業務運営の 4 つの項目について、評価・広報室を中心に現在、18 年度業務実績報告書の作成作業を進めています。各部局と各室・本部から提出された実績をもとにとりまとめ、6 月末に文部科学省に提出します。

本報告書の取りまとめに際しては、各部局、本部の各室、部・課などの多大のご協力に対しお礼申し上げます。

国立大学法人の中期目標期間評価（暫定評価）への対応

平成 20 年度に実施される「国立大学法人の中期目標期間評価（暫定評価）」の進め方について、4 月の文部科学省国立大学法人評価委員会において決定されました。

平成 20 年 6 月末には、これまでの年度業務実績を基にした「実績報告書」とともに、教育・研究の質の向上について、各学部、研究科、研究所等を単位に（独）大学評価・学位授与機構が行う「現況調査表」を提出することになります。

今後、評価・広報室において、対応を検討していく予定です。

大阪外国語大学との統合に向けた広報活動

10 月の大阪外国語大学との統合を機に、「新生大阪大学」を広く社会にアピールするため、現在、①統合 PR 冊子の作成 ②ホームページの改定 ③記念シンボルマークのデザインの検討などを進めています。

ホームページについては、コンテンツの見直し等を、室会議下に設置した「コンテンツ管理・更新ワーキング」及び「英文ホームページ管理ワーキング」で具体の検討を進めています。

財務・会計室

平成19年度教育研究等重点推進経費の執行計画

教育研究全般に渡ってより柔軟な予算配分を行うことができるよう、従来の「間接経費」と「重点経費」を一体化し、平成19年度より新たに「教育研究等重点推進経費」を設けたことについては既にお知らせいたしました。

財務・会計室では本経費の公募を行い、書類審査、ヒアリング等を経て審議を重ねてきましたが、このたび、平成19年度の執行計画案が役員会で承認されました。

採択事業の詳細は次のとおりです。

(単位：千円)

部 局 名 等	事 項 名	金 額
医学部附属病院	病歴管理システムの一部改修(2-1)	100,000
サイバーメディアセンター	全学IT認証基盤整備	75,000
事務局(情報推進部)	学務情報システムの整備・拡充	74,000
事務局(研究推進・国際部 他)	研究支援等に係る人件費	68,479
附属図書館	電子ジャーナル経費	52,298
評価・広報室(総務部/評価・広報課)	データ収集システム保守契約及び機能強化	44,667
国際交流推進本部(研究推進・国際部/国際交流課)	海外拠点本部(サンフランシスコ教育研究センター)運営経費	35,000
国際交流推進本部(研究推進・国際部/国際交流課)	海外拠点本部(バンコク教育研究センター)運営経費	30,000
研究推進室(研究推進・国際部/研究推進課)	機関帰属知的財産の出願等経費	26,000
工学研究科	部局における専門英語教育を実施するためのデジタルコンテンツの開発	25,000
医学系研究科(医学科)	汚染区域微生物学的封じ込め飼育システム(一部貸借)	24,338
歯学部附属病院	診療録保管・管理システム	24,000
歯学研究科	ハイスルデンティスト育成のためのIT教育支援システムの開発	20,000
保健センター	胸部専用画像読取装置	19,982
医学系研究科(医学科)	施設管理システム構築	16,000
附属図書館	学生用図書の体系的・継続的な整備経費	15,000
国際交流推進本部(研究推進・国際部/国際交流課)	海外拠点本部(グローニンゲン教育研究センター)運営経費	15,000
理学研究科(共同応募部局:工学研究科)	高度アクチニド教育・研究のための整備	15,000
バイオ関連多目的研究施設/蛋白質研究所	ネットワーク・スイッチ整備	12,000
事務局(学生部/学生支援課)	快適なキャンパスライフを支援するための体系的な整備経費(3-1)	10,000
研究推進室(研究推進・国際部/研究推進課)	科学教育機器リノベーションセンター	10,000
環境安全研究管理センター	大阪大学薬品管理支援システム(OCCS)に係る運営、管理、更新経費	9,800
大学教育実践センター	英語能力養成のためのe-Learningコンテンツの開発	8,600
大学教育実践センター	新型授業開発プロジェクト	6,400
研究推進室(研究推進・国際部/研究推進課)	部局横断型の研究プロジェクト等支援経費	4,800
歯学部附属病院	看護体制並びに教育支援体制の充実に係る経費	4,500
事務局(施設部)	施設情報管理システムの保守及びデータベース構築	3,900
事務局(施設部)	環境報告書の作成業務委託	3,297
工学研究科	「阪大キャンパスに咲く花」の出版	3,170
工学研究科	大阪大学ロボットシンポジウムの開催経費	3,000
事務局(研究推進・国際部/研究推進課)	大阪大学ホームページ「研究協力情報」に係る経費	2,282
低温センター	寒剤利用負担金請求システム改良	1,995
評価・広報室(総務部/評価・広報課)	組織評価に関する報告書	1,800
安全衛生管理部	資格取得の支援	1,160
教育・情報室(研究推進・国際部/研究推進課)	第39回大阪大学中之島講座(大学開放事業・社会貢献事業)	450
計		766,918

国際交流推進本部

中国との交流促進検討ワーキング

大阪大学は、中国の8大学と大学間学術交流協定を結び、学術交流を積極的に行っています。とりわけ、上海交通大学とは1994年に大学間学術交流協定を結び、以来、毎年、交互に学術交流セミナーを行ってきました。昨年は第11回として、「アジアの持続的発展に向けた研究・教育の架け橋」というテーマで、上海交通大学から17名を迎え、大阪大学において開催しました。こうした中国との交流をさらに促進するべく、国際交流推進本部に「中国との交流促進検討ワーキング」をつくり検討しています。

ところで今年初め、中国政府は「国家建設高水平大学公派研究生項目」という政府派遣留学奨学金制度を発足させました。これは、中国の一流大学の学生を世界各国の一流大学の一流教授の下に留学させるという中国政府の国家人材育成プロジェクトであります。まだ不詳なところが多いですが、中国政府が奨学金・生活費や国際旅費などを支給し、毎年5,000名規模の学生を世界の大学に派遣しようとするものです。大阪大学としても、中国から優秀な留学生を招請したいと考えていますので、「中国との交流促進検討ワーキング」でも受入れの仕方を検討しています。このことについて、各部局のご意見も伺いたいと思っています。

また、5月28日～30日の3日間、中国の浙江大学で、APRU（環太平洋大学協会）の学長会議が開かれ、鈴木直理事・副学長、辻毅一郎国際企画室長ほかが出席しました。

日加戦略的留学生交流促進プログラムへの加入

大阪大学は、カナダの3大学および1大学連合と大学間学術交流協定を結び、カナダとの交流も積極的に行ってきたところですが、本年度、カナダコンソーシアム参加大学と日本のコンソーシアム参加大学との間で、学部学生を相互に交換する交流プログラムが始まります。これは、コンソーシアム形式で戦略的・計画的・継続的に交流を行うことにより、1対1の交流協定では難しい幅広い日加間の学生交流を促進することを目的とするものです。大阪大学は、この日本コンソーシアムに加入することになりました。

大阪大学は新しく生まれ変わります

vol.3

今号では、各センターの教育研究の取り組みや活動を紹介します。

■ グローバルコラボレーションセンター (GLOCOL)



今年10月の大阪大学と大阪外国語大学の統合に先立ち、両大学の研究教育資源を有効に活かすため、4月にグローバルコラボレーションセンター (GLOCOL) が設置されました。言語・国際研究を専門とする大阪外国語大学との統合により、大阪大学の教育目標の一つである「国際性」を強化し、国際社会への貢献を目指します。国際協力と共生社会に関する研究をさまざまな学問分野で推進し、真の国際性を備えた人材養成のための教育を開発するとともに、その成果等にもとづく社会活動を実践することを目的としています。

特 色

グローバル化が進む中で現代世界は、政治構造、経済格差、社会生活などあらゆる面で目まぐるしく変化しています。貧困、環境、教育、感染症などの課題が地球規模で山積する一方、日本国内では「足もとの国際化」が急速に進んでいます。このような中で、グローバル化した世界の現実について深く理解し、真の国際性と行動力をもって意思疎通し、課題に取り組むことができる有用な人材を養成することが求められています。GLOCOLはこうした要請のもと、文部科学省の特別教育研究経費を受けて設立されました。とくに「人間の安全保障 (human security)」実現のための教育研究活動を重視します。

管理運営体制

GLOCOLの運営協議会は、国際交流推進本部長、センター長および大阪大学の全研究科長により構成されます。センター会議はGLOCOL内外の教員で構成され、センターに関する重要事項を決定し執行します。

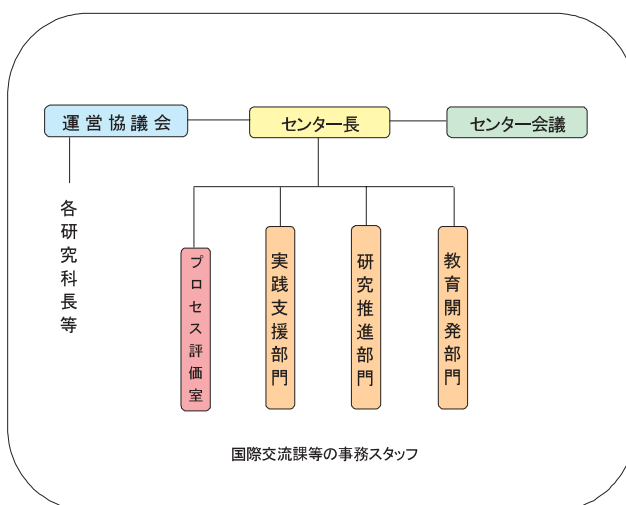
GLOCOLは、教育開発部門、研究推進部門、実践支援部門の3部門にプロセス評価室を加えて事業を進め、「教育」「研究」「実践」を相互に緊密に結合し、それぞれをフィードバックさせ、発展に結びつけることを特徴としています。

小泉潤二センター長（人間科学研究科教授）のほか、辻毅一郎特任教授をはじめとする10名余の特任教員・研究員、若干名の学内派遣教員、大阪外国語大学からの数名の移籍教員、そして各部局からの約50名の兼任教員という構成でスタートし、この組織を国際交流課のスタッフと新規採用の事務職員が支えます。

4月には、最初のオフィスを大阪大学中之島センター内に開設しました。この秋には吹田キャンパス内ウエストフロントに本部オフィスを設け、その後さらに活発な運営を展開していく予定です。



千里門横のウエストフロント完成予想図（右は工学研究科）

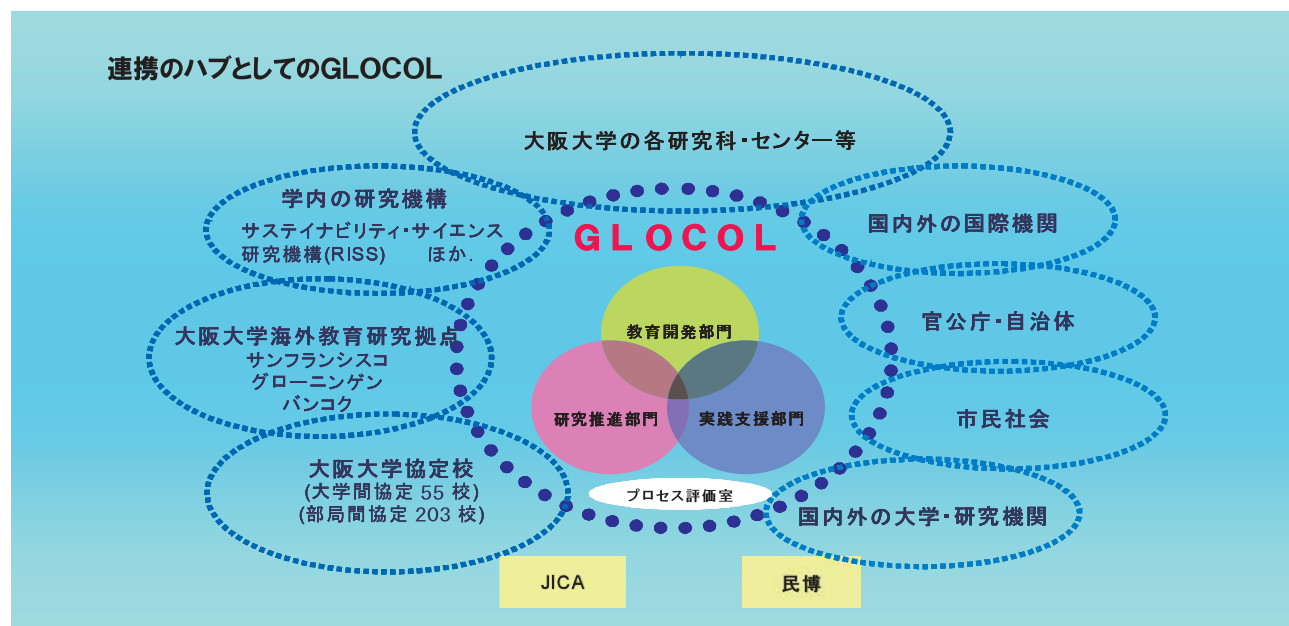


管理運営体制

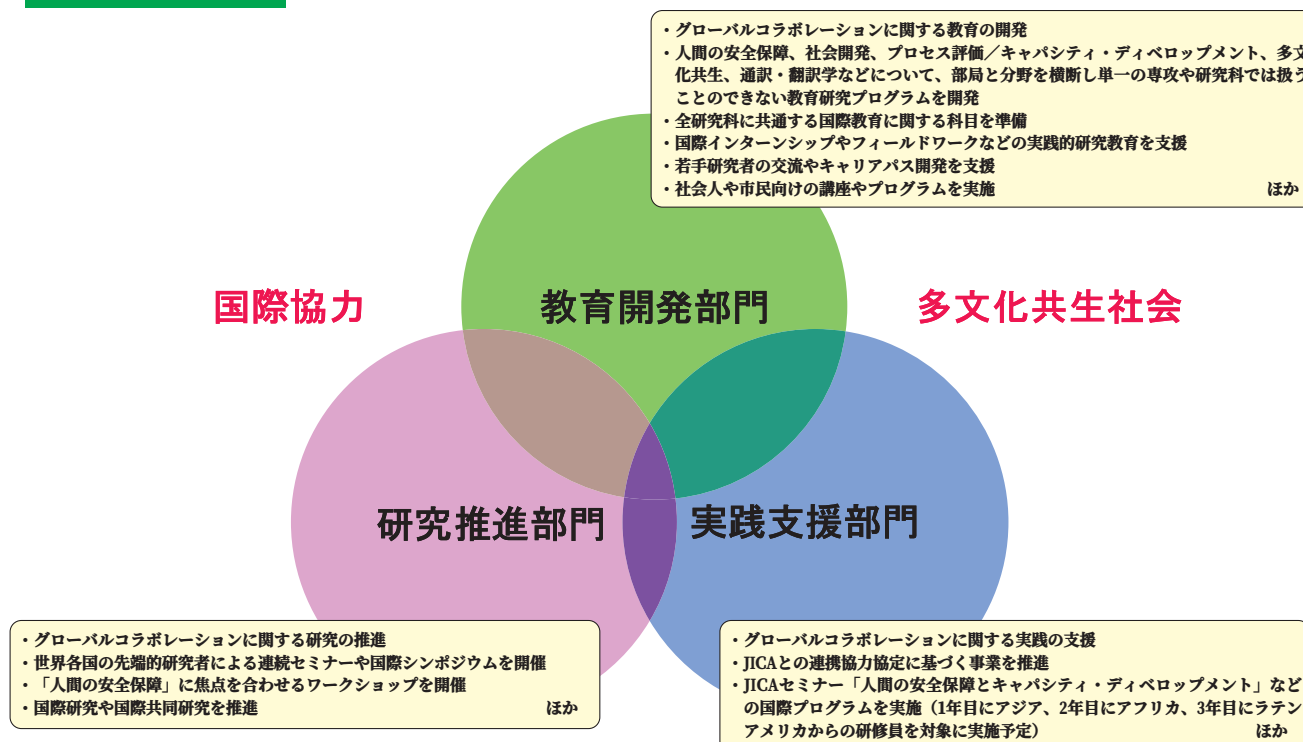
役員室だより(大阪外国語大学との統合)

ネットワークづくり

グローバルなコラボレーション（国際協力）に個別に取り組む部局や組織を、文系・理系にかかわらず有効に連携させるシステムをつくり、新しい教育と研究と実践の場を実現します。グローバルな協力と協働という広いテーマに対して、研究科を横断する取り組みを行います。また、大阪大学内の連携のハブとなるばかりでなく、国内外の大学、研究機関、国際機関、官公庁・自治体、市民社会等と幅広いネットワークを築きます。



これからの活動



プロセス評価室（プロセス評価によるセンターの活性化）

役員室だより(大阪外国語大学との統合)

■ 世界言語研究センター

世界言語研究センターは、世界の言語と言語を基底とする世界の文化社会について研究を行い、その成果を大阪大学全体の教育研究に活用するとともに、社会のニーズに応える教育研究プログラムとして展開することを目的として箕面キャンパスに設置されます。

特 色

研究者の陣容は、外国語学部で教育する世界の主要な 25 言語を包摂するほか、関連する多くの少数言語についても研究対象としています。総合大学の中でこうした陣容と目標を持つ、日本で唯一の基幹的組織として、研究連携、異業種連携、教育開発の 3 系域を部門横断的に組織し、学内外の諸組織と連携を強化しつつ足もとの国際化にも対応します。言語文化研究の視点から見た民族紛争の背景に関する地政学的研究や、高度外国語教育全国配信システム用コンテンツ作成などはその一例です。

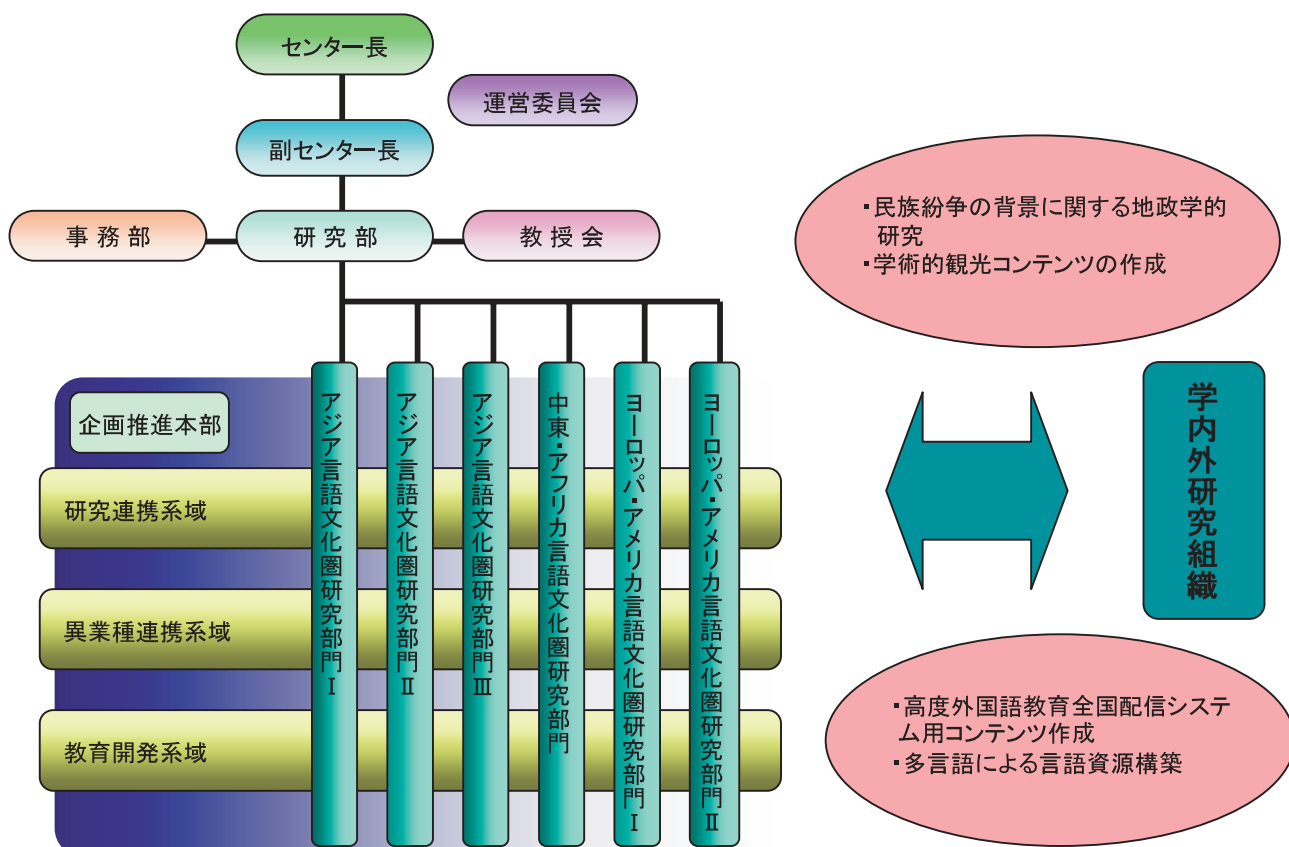
目 的

- 多彩な国際的教育・研究プログラムの展開と国際社会に通用する多彩な人材の養成
- 急速に進行する「足もとの国際化」に対応するなどの社会への貢献

組織構成

6つの研究部門は地域単位に教員が所属する組織です。地域横断的な研究を推進するため次の3つの系域を組織します。

- 「研究連携系域」は、他研究科、あるいは他研究機関との研究面での連携協力を進めます。
- 「異業種連携系域」は、多言語、e-learning、観光などのテーマに関連事業者、JICA 等との連携協力を進めます。
- 「教育開発系域」は、世界各地の言語文化教育に関わる教材、教授法、言語教育の到達度評価など、教育デザインの分野で開発を進めます。



役員室だより(大阪外国語大学との統合)

■ 日本語日本文化教育センター

日本語日本文化教育センターは、1954年に大阪外国語大学に設置された留学生別科を出発点に、半世紀以上にわたって国費外国人留学生に対する日本語・日本文化教育の拠点機関として、我が国の留学生受け入れ施策の一翼を担ってきました。これまで4,000名を超える修了生を輩出し、今も毎年約50の国や地域から150名近い国費留学生を受け入れています。

本センターでは、統合後も国費学部留学生予備教育や国費日本語・日本文化研修留学生教育を中心としたプログラムを提供し、また、世界の日本語・日本文化教育の充実発展に寄与するという目的のもと、ウィーン大学東アジア研究所、オックスフォード大学東洋研究所、カリフォルニア大学バークレー校東アジア言語文化学部など、海外日本研究拠点20機関との国際的な教育連携ネットワークを引き続き強化・充実していきます。

日本語日本文化教育研究機関ネットワーク



- 欧州
 - ① ウィーン大学 東アジア学科日文学研究所 (オーストリア)
 - ② ルーヴァン・カトリック大学 東洋学科 (ベルギー)
 - ③ トゥールーズ・ミラユ大学 外国語学科 (フランス)
 - ④ ナポリ東洋大学 アジア学科 (イタリア)
 - ⑤ ライデン大学 日本朝鮮研究センター (オランダ)
 - ⑥ ベルゲン大学 言語学文学研究所 (ノルウェー)
 - ⑦ チューリッヒ大学 東アジア学科 (スイス)
 - ⑧ オックスフォード大学 東洋研究所 (イギリス)
 - ⑨ ロンドン大学 東洋アフリカ研究院 (イギリス)
 - ⑩ エトベシュ・ロラード大学 日本学科 (ハンガリー)
 - ⑪ プカレスト大学 東洋文学言語学科 (ルーマニア)
 - ⑫ ミュンヘン大学 日本センター (ドイツ)
 - ⑬ バルセロナ自治大学 通訳翻訳部 (スペイン)
 - ⑭ ソフィア大学 東アジア言語文化学科 (ブルガリア)
 - ⑮ ヤギェウォ大学 日本中国学科 (ポーランド)
- 北米
 - ⑯ カリフォルニア大学バークレー校 東アジア言語文化学科 (アメリカ)
- 中南米
 - ⑰ リオデジャネイロ州立大学 ブラジル日本プログラム (ブラジル)
- 太平洋州
 - ⑱ モナシュ大学 言語文化言語学研究部 (オーストラリア)
 - ⑲ ウェリントン・ビクトリア大学 アジアヨーロッパ言語文化学部 (ニュージーランド)
- アジア
 - ⑳ 香港大学專業進修学院 日本語・東洋諸言語学科 (中国)

教育プログラム

- 国費学部留学生プログラム
- 国費日本語・日本文化研修留学生プログラム
- 国費研究留学生プログラム
- 国費教員研修留学生プログラム
- 短期留学生プログラムのための日本語コース

出版・研究活動

- 『日本語・日本文化』(1969年創刊 継続刊行中)
- 『日本語教材叢書』Series I (既刊50巻)、Series II (既刊8巻)
- 『授業研究』(2003年創刊 継続刊行中)
- 『日本文学資料データベース』(2005年公開 継続更新中)
- 日本語日本文化教育研究会(1992年設立)
- 日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議(全国会議 1996年度以降毎年1回開催)



日本語日本文化教育センター (大阪外国語大学)

ストップ!ザ・構内の交通事故

構内の交通安全対策ワーキング委員 山 本 仁（安全衛生管理部教授）

交通事故が起こると、被害者、加害者ともに身体的、精神的に深い傷を負います。大阪大学を構成する全ての人が安全で快適にキャンパスライフを楽しむことができるよう、一人ひとりがルールとマナーを守ることを切に望みます。

■ 102のパンフレットを読みましたか？

これは今年3月に構内の交通安全対策ワーキングが作成し、全学の皆さんに配布したものです。表紙の「102」という数字は、このパンフレットを作成するまで、過去11年間に大学へ報告のあった構内交通事故の件数です。もうこれ以上、学内での交通事故被害者を増やしたくないという思いから作成したのですが、残念なことに今年度に入ってから5件もの交通事故が安全衛生管理部へ報告されています。

これらの事故は、**学内の交通安全ルールを守って**いれば起こりようがなかったと考えられるものばかりです。



■ 各キャンパスの交通事故の特徴

吹田キャンパス

吹田キャンパスは、道路幅も広くスピードが出やすいため、車やバイクが関係する事故が多く、負傷や被害の程度も大きくなりがちです。スピードを抑制するハンプ（交差点の段差）の設置などを行っていますが、**歩行者最優先**という学内交通ルールを守らない運転が多く見られます。**車やバイクの運転者の方は歩行者に優しい運転を厳守**してください。ワーキングでは、ハンプの形状や設置箇所の再検討、注意喚起のチラシ等を通じて、安全で快適な学内交通環境の保持のため活動しています。



微研バス停付近での事故



守られていない阪大坂でのルール

豊中キャンパス

豊中キャンパスは、幅員も狭く、通行人や自転車が多いため、車やバイクのスピードの出しすぎによる事故は吹田キャンパスに比べて少ないです。しかし、狭いが故の接触事故が多く報告されています。

豊中キャンパスの大きな問題として、**自転車の関わる事故が多い**ことがあげられます。キャンパス内に多数の自転車が駐輪され歩行障害になったり、自転車に関わる衝突事故が報告されています。阪大坂は昨年の春に整備され、豊中キャンパスの玄関にふさわしい、快適なプロムナードとして生まれ変わりました。しかし、道路が整備された結果、自転車のスピードが上がり、衝突事故が起こった場合大きな被害になってしまいます。**阪大坂では、自転車は降車し手押しで通行するのがルール**です。

構内の交通ルール（いま一度読んで、確認してください。）

■自動車のルール

許可車以外の原則入構禁止
地域住民に対する迷惑駐車絶対禁止



- ・歩行者最優先。
- ・キャンパス内では徐行運転し、注意義務を守る。運転中の携帯電話禁止。
- ・入出構する際は、入構許可証を提示する等、適切な手続きを行う。
- ・定められた駐車場に必ず駐車する。
- ・シートベルトは正しく装着し、安全運転を心がける。
- ・地域住民に迷惑や危険を及ぼさない。路上駐車、長期放置、夜間騒音の禁止。



構内速度 30km の標識



駐輪場の様子（吹田キャンパス・西門横）

■オートバイ・原付のルール

許可車以外の原則入構禁止
地域住民に対する迷惑駐輪絶対禁止



- ・歩行者最優先。
- ・キャンパス内では徐行運転し、注意義務を守る。運転中の携帯電話禁止。
- ・入出構する際は、入構許可証を提示し、定められた出入口から入出構すること。
- ・定められた駐輪場に整然と駐輪する。
- ・ヘルメットは正しく装着し、安全運転を心がける。
- ・阪大坂は乗り入れ禁止。
- ・地域住民に迷惑や危険を及ぼさない。路上駐輪、長期放置、夜間騒音の禁止。
- ・駐輪の際は必ず施錠し、U字ロックやチェーンロックをかけるなど二重施錠し、各自防犯に努める。

■自転車のルール

地域住民に対する迷惑駐輪絶対禁止



- ・歩行者最優先。
- ・スピードは控えめに。
- ・阪大坂は歩行者優先道路のため、降車して手押しで通行する。
- ・地域住民に迷惑や危険を及ぼさない。路上駐輪、長期放置、並行走行の禁止。
- ・定められた駐輪場に整然と駐輪する。
- ・キャンパス内の歩道では自転車走行禁止。
- ・入出構は定められた出入口から。
- ・駐輪の際は必ず二重施錠し、氏名・住所等を貼付の上、各自防犯に努める。



放置自転車（豊中キャンパス・学生交流棟前）

「構内の交通安全対策ワーキング」って？

構内の交通安全対策ワーキングは、大阪大学内の交通と安全について、ハードとソフトの両面から整備をしていく目的で設立されたチームです。施設マネジメント委員会、学生生活委員会、キャンパスデザイン室、安全衛生管理部から委員が集まり、大阪大学を構成する全ての人が安全で快適に過ごせるよう、委員のそれぞれの専門を生かして幅の広い議論をし、活動しています。

待兼山5号墳出土の馬形埴輪、馬曳形埴輪を復元

埋蔵文化財調査委員会では「待兼山周辺修景整備工事」に伴う発掘調査（2005年）で見つかった出土品の整理作業をすすめて来ましたが、このほど待兼山5号墳を飾っていた珍しい埴輪類の全形復元に成功しました。

待兼山5号墳は、古墳時代中期（5世紀後半）に築造された直径15mの円墳で、後世の破壊により埋葬施設は失われていましたが、古墳の周りを区画した溝からは埴輪や須恵器の破片が大量に出土しました。そして、昨年度これら出土品の分析や復元作業を続けた結果、円筒埴輪を中心に様々な形象埴輪が用いられていたことが明らかになりました。なかでも、最も大きな発見は大阪府下で初めて馬と馬を曳く人物（馬曳）の埴輪がセットで確認されたことです。

馬曳形（うまひきがた）埴輪は入墨が施された顔面、馬を引く左手、腰帯が表現された胴部片が出土しています。各部位の大きさと類例を参考にしながら慎重に検討したところ、高さ64cmに復元できました。馬形埴輪片はこの馬曳形埴輪片とともに同じ場所で集中して出土しました。こちらは高さ78cmに復元できました。

馬形埴輪は5世紀前半に出現します。しかし、出現期の馬形埴輪に馬曳形埴輪がセットとなった例はなく、古墳時代後期（6世紀以降）には例があるものの、5世紀代のものは非常に稀です。つまり、5世紀後半に築造された待兼山5号墳から出土した一対の馬と馬曳の埴輪は全国的に見ても最古級の事例となるのです。また、5世紀にさかのぼる馬曳形埴輪自体が全国で10例に満たないもので、大変貴重な資料となりました。

乗馬の風習は5世紀に朝鮮半島から導入された新しい習俗であり、馬の所有は時代の最先端を行く権威の象徴であ



待兼山5号墳の埴輪検出作業



待兼山5号墳全景

ったと考えられます。このような習俗を取り込んだ最新の埴輪群が、大古墳の集中する奈良盆地や大阪南部ではなく、大阪北部の直径15mの小円墳から出土したことは注目されます。倭王権の古墳祭式を通した政治的結束の範囲が、前方後円墳を営んだ地域首長のみならず、中小の地方有力層まで浸透してきたことを示していると考えられるからです。

豊中キャンパス内では、ここ20数年にわたる文化財調査によって4～5世紀の古墳がすでに6基確認されています。これにより、文字史料が残される以前の箕面川流域を勢力としていた地域豪族の存在が明らかとなり、西摂地域の古墳時代史に新たなページを加えることができました。

待兼山5号墳は、現在装いを新たにした新「阪大坂」の坂下、駐輪場の横に地中保存されており、5号墳の周溝の範囲が石敷きの色や材質の違いで地表表示されています。また今回紹介した埴輪や須恵器は、新装オープンする総合学術博物館（待兼山修学館）の常設展示でお披露目する予定です。

（埋蔵文化財調査委員会、埋蔵文化財調査室）



馬曳形埴輪（左）と馬形埴輪

サステナビリティ・サイエンス研究機構がワークショップ開催

サステナビリティ・サイエンス研究機構（RISS）が主管するサステナビリティ科学技術開発工房プロジェクト『人間の安全保障とサステナビリティ』は、2月17日（土）、本学中之島センターで、「文理融合にもとづく人間の安全保障研究」の第1回ワークショップ「安全と安心の科学を目指して」を開催しました。

このワークショップは、「人間の安全」という、研究分野を問わず複合関連が深いテーマを、特に文理融合の枠組みにおいて「科学と安全」という視点に絞り、積極的な意見交換を図ることを目的としたものです。

ワークショップでは「安全学」の第一人者として知られる村上陽一郎国際基督教大学教授（東京大学名誉教授）が、長年の研究に基づく独自の視点と理論から、日本の安全性の問題点を鋭い視点で分かりやすく分析し、その解決への重要性として、一人ひとりの人間が「安全、安心」を目標にすること、人間社会の課題を反映した社会システム作りを実現していくための方法論について講演されました。引き続き行われた質疑応答では、医療、科学、食品などでの人間の安全保障や持続可能な社会形成のあり方に関して、熱い議論が展開されました。この文系・理系の枠を越えた取り組みは、4月に新たに設立された大阪大学グローバルコラボレーションセンター（センター長：小泉潤二大学院人間科学研究科教授）の活動とも連動しつつ、今後のさらなる発展が期待されています。

また、3月16日（金）にも大阪科学技術センターで、産学双方から研究者を招き、最先端の研究を学ぶことや産学間の識者による幅広い議論を行うことを目的としたエコ・プロセスワークショップ「バイオ技術の環境産業への展開～植物・微生物の新たな機能の活用～」を開催し、多数の方が参加されました。



このワークショップでは、関西電力株式会社研究開発室の宮坂 均氏の環境汚染物質のバイオセンサーなど最新のバイオ技術が紹介され、生物機能に関する専門的な質問から製品化した際の具体的な提案まで活発な議論が交わされました。

また、企業の環境問題への取り組みとして、本学の共同研究講座「コマツ（建機等イノベーション）」の竹田太四郎招へい教授が省エネ・省資源を目指した建築機械の設計・使用・管理について講演されるなど、いくつかの取り組みが紹介され、普段は関連性の低い業種での取り組みを学ぶことができ、異業種間ならではの刺激ある議論が展開されました。

参加者は今回のワークショップを通して、様々なバイオ技術と産業分野における取り組みについての情報共有、産学関係者間での交流などを行うことができ、非常に有意義な会議となりました。

（サステナビリティ・サイエンス研究機構）

歯学部附属病院「院内感染防止対策に関する講演会」開催

歯学部附属病院では、3月13日（火）にD棟4階大講義室において教職員及び学生等を対象に、院内感染防止対策に関する講演会を開催しました。

当日は、雫石 聡歯学部附属病院長の趣旨説明の後、名古屋大学医学部附属病院難治感染症部の馬場尚志先生により「適切な病院感染管理を目指して」と題して講演が行われ、現場の実例を織り込んだ力のこもった話に参加者約230名は熱心に聞き入っていました。

講演後、参加者からは院内感染防止対策に関する演題について得るものが多かったとの声が多く好評でした。

（大学院歯学研究科・歯学部）



歯学部附属病院「医療事故防止に関する講演会」開催

歯学部附属病院では、3月19日(月)にD棟4階大講義室において教職員及び学生等を対象に、医療事故防止に関する講演会を開催しました。



当日は、平石 聡歯学部附属病院長の趣旨説明の後、東京大学大学院医学系研究科医療安全管理学講座の前田正一助教授により「医療事故とインフォームド・コンセントに関する法律上の問題」と題して講演が行われ、インフォームド・コンセントの問題を中心に医療事故から生ずる法律問題、すなわち訴訟、損害賠償、法的責任等について内容の充実した話が行われ、参加者約200名は熱心に聞き入っていました。

講演後、参加者からは医療に関わる法律問題について得るものが多かったとの声が多く好評でした。

(大学院歯学研究科・歯学部)

歯学研究科・歯学部附属病院の新棟竣工記念式典・祝賀会開催

歯学研究科及び歯学部附属病院は、歯学研究科口腔科学研究棟及び歯学部附属病院先端口腔総合診療棟が平成18年12月に竣工したことを記念し、3月26日(月)に竣工披露式典、見学会及び竣工披露祝賀会を開催しました。

研究棟5階弓倉記念ホールで開催された披露式典では、学内外から約100名の出席者があり、上嶋善規大学院歯学研究科副研究科長の司会により、高田健治大学院歯学研究科長の式辞に続いて、宮原秀夫総長の挨拶があり、赤塚義英文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室長、高杉 豊大阪府副知事から祝辞がありました。

引き続き、研究棟、診療棟の見学会が行われ、出席者は新棟各階の設備等を興味深く見学されました。

見学終了後、歯学部記念会館に会場を移し開かれた竣工披露祝賀会では、平石 聡歯学部附属病院長、鈴木 直理事・副学長の挨拶、岡 邦恭大阪府歯科医師会会長（代読：山口邦男大阪府歯科医師会常務理事）、玉利行夫歯学部同



新病院棟を見学する宮原総長

窓会会長の祝辞、また、玉利会長から寄附目録の贈呈ののち、鳥居宏次アドバイザーボード委員の発声による乾杯がありました。学内外の来賓・関係者が参加し、終始和やかな雰囲気の中懇談が行われ、竣工を祝いました。

口腔科学研究棟は、鉄筋地下1階地上5階建て、延べ床面積5,854㎡、地下1階にRI実験施設、1階に動物実験施設、2階から5階に計20室のオープンラボを設置し、安全性に配慮した、また、高速ネットワークなどを備えた、先端の口腔科学研究に対応した研究施設となっています。

一方、先端口腔総合診療棟は、鉄筋地上4階建て、延べ床面積4,812㎡、1階に手術室、2階に臨床研修等実習室等、3階に外来診療ゾーンが置かれ、4階は40床の病室を備えた病棟で、全体として患者様の快適性やプライバシーに配慮した診療施設となっています。

(大学院歯学研究科・歯学部)



祝辞を述べる赤塚文部科学省大学病院支援室長

JICA草の根技術協力事業完了

歯学研究科口腔外科学第一教室は平成16年4月から19年3月にかけて行われたJICA草の根技術協力事業「メキシコ合衆国における先住民（インディヘナ）に対する口唇口蓋裂に対する医療援助」を完了しました。

日本での口唇口蓋裂患者は約600名の出産あたり1名の頻度で発症しますが、メキシコ南部山岳地域ではより高い頻度で発生しています。日本では生後早期から種々の治療が開始されるのに対し、この地域の患者は地理的、経済的問題から十分な医療を受けることができません。口唇裂・口蓋裂に伴う様々な障害に悩まされ、多くの方が成人後も



現地病院スタッフ、CLAYPAスタッフ、
大阪大学スタッフ（古郷幹彦教授・前列中央）と患者の集合写真

口唇裂や口蓋裂の一次手術すら受けていないため、山岳地帯でひっそりと生活しています。メキシコ合衆国モンテレーのNGO団体CLAYPA代表のアリスベ氏はこれらの患者を救うため、患者の多い地域に出向き治療を行う医療ボランティア活動を開始しました。アリスベ氏が大阪大学で口唇口蓋裂治療を学んだつながりから、平成11年より当教室も定期的に医療ボランティア活動に参加し始め、その後この活動がJICA事業へと発展しました。活動は年4回メキシコ合衆国に医師を派遣し、医療物品の供給、手術指導・実施のみならず現地州政府保健省などの疾患や障害を管理すべき当局に働きかけ、疾患と疾患に対する治療法、また治療による障害回復の見込みなどを指導し、州政府として疾患に対応するよう啓発活動を行ってきました。活動実績としては、①3年間で延べ27人の指導医師の派遣、②600名以上の患者診察と治療法の議論、③延べ300名の口唇口蓋裂患者の手術指導、④延べ80人の医師・看護師への技術指導、⑤安全な手術、術後管理が出来る設備（麻酔器2台、心拍・酸素飽和度・血圧モニター2台、手術器具50点）と手術消耗品・薬品の供与、を行うことができました。

平成19年3月末をもって、JICA事業としては終了しましたが、今後も当教室としては活動を継続し、当初からの目的である「メキシコ合衆国南部山岳地域で患者が安全に治療を受けうる環境を作る」ために、更なる技術指導と環境整備を支援する予定です。

（大学院歯学研究科・歯学部）

平成19年度大学院工学研究科博士課程入学式挙行

平成19年度大学院工学研究科博士前期課程・後期課程入学式が、4月4日(水)本学コンベンションセンターMO



ホールにおいて挙行されました。

当日は、大学院工学研究科新入生の博士前期課程799名、博士後期課程120名中、約500名の新入生、保護者が出席し、会場は超満員となりました。

式は、豊田政男大学院工学研究科長、谷口研二教育研究評議員を始め、4名の副研究科長、10名の各専攻長の列席のもと、掛下知行教務委員長（副研究科長）の司会により進められ、列席者の紹介、豊田研究科長の式辞の後、入学生を代表して博士後期課程精密科学・応用物理学専攻の半田宗一郎さんが宣誓を行いました。

続いて、来賓の馬越佑吉理事・副学長による「発想の転換、チャンスを活かせ」と題した入学記念講演が行われ、閉式となりました。

（大学院工学研究科・工学部）

建国大学校法科大学と学術交流協定締結

4月6日(金)、韓国の建国大学校法科大学(ソウル市)と大学院法学研究科・法学部及び大学院高等司法研究科並びに大学院国際公共政策研究科が学術交流協定を締結しました。

建国大学校法科大学は、1946年5月に発足した朝鮮政治学学院を源流とし、1954年公式に独立の法科大学となりました。その後幾度かの組織再編を経て、現在は1,000名以上の学部在學生と約30人の教授団を擁する建国大学校の主要部局として、多くの法曹や法学教授を輩出している韓国有数の法学研究教育機関となっています。

この度の調印式は、中国の復旦大学(上海市)のシンボリックな建物である光華楼で行われました。大阪大学と建国大学校は、すでに3年前から復旦大学法学部とともに、「東アジア地域連携フォーラム」を実施し、相互の研究交流事業を積極的に進めてきましたが、本年、復旦大学において「金融市場の開放とリスク・マネジメント」をテーマにシンポジウムを開催するのを機に、本協定の締結を行いました。なお、当日の調印式には、本学からは、三成賢次大学院法学研究科長・法学部長、松川正毅大学院高等司法研究科長及び床谷文雄大学院国際公共政策研究科長が、建国大



左から床谷研究科長、松川研究科長、三成研究科長、金大学長

学校からは金泳哲法科大学長がそれぞれ立ち会いました。

現在、この協定に基づいて、学生を交換する計画が進んでいます。さらに、これから各種シンポジウムの開催や研究者の交流などを行い、法学研究科・法学部をはじめ、高等司法研究科、国際公共政策研究科と建国大学校法科大学との交流を大いに深めていきたいと考えています。

(大学院法学研究科・法学部、大学院高等司法研究科、
大学院国際公共政策研究科)

第2回大学教育実践センター新任教員研修開催

満開の桜の花の咲く4月6日(金)、大学教育実践センターにおいて、第2回新任教員研修が開催されました。この新任教員研修は、平成18年1月以降に採用された教員で共通教育の授業・実験を平成19年度に担当する専任教員、平成18年度・平成19年度に新たに採用された非常勤講師を対象として実施されたもので、対象者は80数名あり、その内53名(専任教員26名、非常勤講師27名)が出席



しました。

研修では、まず鈴木 直理事・副学長が「大阪大学の歴史と教育目標」というテーマで、大学の源流は懐徳堂や適塾にあること、教養・デザイン力・国際性の3つの教育目標等について話をされました。次に、高杉英一センター長が教員と学生の対話を重視する「大学教育実践センターの教育目標」を説明されました。次いで、「共通教育のしくみ」「教育実践集の活用について」は山成数明教員研修支援部門長が、「学生による授業評価アンケート結果について」「WebCTの活用について」は望月太郎教育評価部門長が、それぞれ報告しました。最後に真鍋昭治郎ガイダンス室長が、「ガイダンス室とその役割」についてデータを含めた現状を報告しました。

WebCTの導入については、「画期的」「積極的に活用したいという気持ちになった」等多数の要望や感想が出されました。参加者のアンケートからは、「自分の授業改善の参考になった」と回答した教員が6割を占めており、肯定的な意見が多く寄せられました。

(大学教育実践センター)

「ナノ高度学際教育研究訓練プログラム」平成18年度修了認定証授与式 および平成19年度開講式等開催

ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構は、「ナノ高度学際教育研究訓練プログラム」社会人再教育プログラムの平成18年度第3期生修了認定証授与式、および平成19年度第4期生開講式ならびに特別講義、懇談会を、175名（遠隔教室にて62名を含む）の出席のもと、4月6日（金）に本学中之島センターにおいて開催しました。

本プログラムは、科学技術振興調整費新興分野人材養成プロジェクトとして、平成16年度より5年間の予定で実施中の、実社会で活躍中の研究者・技術者を対象とした5コースからなる研究科横断型の高度再教育プログラム（1年間）です。また、サテライト教室は近畿、関東、東北から四国地区にも拡大し、多くの企業のご協力を得ております。

修了認定証授与式（3期生94名）では、馬越佑吉機構長（理事・副学長）より、修了認定証および大阪大学エクステンション修了証書が授与され、開講式（4期生106名）では、馬越機構長の開会の挨拶、赤井久純再教育プログラム主任（理学研究科教授）の履修指導がありました。また特別講義「ナノテクと基盤技術 ―ハード基盤材料を中心として―」（馬越機構長）では、受講生が質問を交えて熱心に聞き入っていました。引き続いての懇談会には、106



馬越機構長の特別講義風景

名が参加し、受講生、大学関係者相互の親交を深める絶好の機会となりました。

今年度の大学院生向けのプログラムもスタートし、外部講師によるナノテクキャリアアップ特論開講や社会人再教育講義への聴講許可などが加わり、両プログラムの相互乗り入れによって内容の一層の充実が図られています。

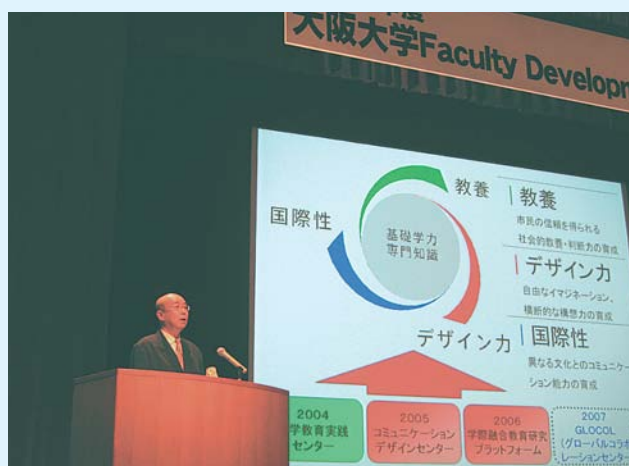
（研究推進・国際部研究推進課）

「助教」を対象としたファカルティ・ディベロップメント研修実施

学校教育法の改正に伴い、新たに「助教」となった教員を対象としたファカルティ・ディベロップメント研修を、4月11日（水）、12日（木）の2日間にわたり実施しました。本研修は、「助教」の教育指導能力の向上を図り、質の高い教育活動の維持を目的として実施されたもので、2日間で486名が参加しました。研修は、宮原秀夫総長の開会挨拶の後、大阪大学の教育目標である「教養」「デザイン力」「国際性」を備えた優れた人材の育成、キャンパスライフにおける諸問題、学生ケアのポイント等の講話の他、全学共通教育科目において優れた授業を実践した教員に贈られる、大阪大学共通教育賞受



開会挨拶をする宮原総長



講話をする鷲田清一理事・副学長

賞者の授業での様々な工夫並びに特に優れた教育プログラムの取組として現代GP、特色GPに採択された教員から様々な教育方法等の事例紹介が行われ、参加者は熱心に聞き入っていました。

（学生部学務課）

適塾特別展示開催

平成 19 年度の適塾特別展示「緒方洪庵と適塾」が、本学と適塾記念会との共催で 3 月 27 日(火)から 4 月 16 日(日)まで適塾において開催されました。

今回は、幕末の適塾で緒方洪庵と塾生たちがいかに変革期に立ち向かい、明治期の日本の医学の基礎づくりに貢献したかを示す数々の資料を公開しました。

18 日間の期間中、1,874 名の参観者が訪れ、好評のうちに閉幕しました。

(総務部総務課)



平成 19 年度大阪大学初任者研修実施

今年度最初の研修である平成 19 年度初任者研修が 4 月 17 日(火)から 19 日(木)までの 3 日間にわたり行われました。

この研修は、昨年 5 月 1 日以降採用された事務系、図書系及び技術系職員 21 名を対象に、「職員としての自覚と意識の確立を図り、初任職員として必要な基礎的知識・技能を身につけ、職場への適応力を養う」ことを目的として実施されたものです。



三浦 新人事課長の挨拶

17 日、18 日はコンベンションセンターで、(株)富士ゼロックス総合教育研究所のセミナーリーダーである正垣公也さんを研修講師に迎え、初任者として必要

な心構えや知識について演習を担当していただきました。この演習はグループ討議を主体とし、「役割分担」、「これからの私」、「仕事とコミュニケーション」、「仕事の人間関係とマナー」、「自分を知る」を通じて、活発な意見交換が行われ、全員意欲的に様々な課題に取り組みました。

19 日は会場を豊中キャンパスに移し、午前は、大阪大学の歴史を理解し、親しみと愛情をもって仕事に取り組んでもらうために、総合学術博物館を見学した後、高杉英一大学教育実践センター長による、大阪大学の歴史についての講義が行われました。

午後は、本学セクシュアル・ハラスメント専門相談員の周藤由美子さんが講師となったセクシュアル・ハラスメント防止のための講義において、熱心な討議が行われました。

こうしたプログラムを通じてお互いに親睦を深め合うなど有意義な時間を共有し、3 日間の研修を無事修了しました。

(総務部人事課)

第 27 回日本医学会総会企画展示に「内視鏡手術支援ロボット」を出展

大学院基礎工学研究科機能創成専攻制御生産情報講座(宮崎文夫教授)と大学院医学系研究科外科学講座消化器外科(門田守人教授)及び大研医器株式会社(山田圭一代表取締役社長)が共同で研究開発している「内視鏡手術支援ロボット」が、3 月 31 日(土)から 4 月 8 日(日)まで大阪城ホールで開催された「いのち ひと 夢 Expo2007—みんなで考える医学と医療—」(第 27 回日本医学会総会企画展示)に展示されました。

内視鏡手術支援ロボットとは、外科医の第三の目や手となって手術器具を操作し、内視鏡外科手術の際、外科医を支援するものです。本ロボットは、従来研究の課題であるロボットの小型軽量化(従来品の 1/10 以下)、低コスト化(1/1000 以下)、安全性をすべて解決したものであり、多

くの入場者から注目を集めました。特に研究者や医療関係者からは、本ロボットの実用化を望む声を多く聞きました。



本展示を通じ、本学が研究している内視鏡手術支援ロボットを広くアピールすることができました。

(大学院基礎工学研究科・基礎工学部、
大学院医学研究科・医学部)

大阪大学と富国生命保険相互会社との間で連携推進に関する協定締結

大阪大学は、富国生命保険相互会社（秋山智史取締役社長）と、少子高齢化社会の到来を迎えるにあたり、産学間の連携を通して、科学・技術力向上や人材育成に資することを目的として、相互に協力が可能な分野において、具体的な協力を有機的に推進していくことに合意し、4月24日



山本常務取締役（左）と握手をする馬越理事・副学長（右）

（火）、協定の調印式が馬越佑吉理事・副学長、山本幹男富国生命保険相互会社常務取締役の出席のもと、大阪大学において行われました。

この席上、馬越理事・副学長から「大阪大学では市民のため、社会のための学術を絶えず意識しているコミュニケーションデザイン・センター、サステナビリティ・サイエンス研究機構を設立し、環境に配慮した持続可能な社会システムの構築など、社会学連携を積極的に推進しており、今回、健全な社会と体づくりに根ざした健やかで豊かな社会、持続可能な社会の構築のため、この連携を通じて社会に新しい生き方を提言していきたい」と挨拶がありました。また、山本常務取締役からは「富国生命では『フコク生命チャリティーコンサート』などの文化活動や『フコク生命（いのち）の森プロジェクト』などの環境保全活動に取り組む、社会への貢献を積極的に実践していますが、今回の連携を機により一層、社会へ貢献していきたい」と挨拶がありました。

（研究推進・国際部産学連携課）

いちよう祭開催

4月30日（月・振替休日）及び5月1日（火）に、本学の創立記念日を祝し、全学を挙げて新入生を歓迎するとともに、教職員、学生の親睦を図ることを目的とした「いちよう祭」が開催されました。

新入生、保護者のほか、大阪府下の各高等学校など学外の方々へ広く参加を呼びかけ、各部局開催の施設開放・展示会・講演会等に多数の方々を訪れました。

（総務部総務課）



第2回大阪大学ホームカミングデイ開催

(トピックスからの続き)

当日は主催者を代表し宮原秀夫総長の挨拶の後、同窓会連合会会長の熊谷信昭元総長から、本行事の開催を祝福するとともに、「世の中は人と人とのつながりで動き、世の中のことは、結局人と人とのつながりで決まっていっている」と大阪大学同窓生相互の結束の重要性が述べられました。

また、本年は、金森順次郎元総長（同窓会連合会副会長）から「大阪大学と湯川秀樹博士」と題し講演が行われ、共通教育本館にて開催された「素粒子の世界を拓く 湯川秀樹・朝永振一郎展」の内覧会にも多くの参加者が訪れました。

レセプションでは、学生サークル（軽音楽部 swing）の軽快なジャズ演奏をバックに、終始和やかな雰囲気の中で親睦、交流が図られ、近況を語り合いながら、互いの活躍と母校の発展を祈念しつつ次回の再会を誓い合いました。

なお、この好日に合わせ、理学部、基礎工学部、経済学部各同窓会も総会やホームカミングデイなどの行事を開催しました。



講演を行う金森元総長



当日の詳しい様子は、同窓会連合会のホームページをご覧ください。

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/dousoukai/>

(総務部総務課、企画推進課)

人権問題に関する映画会開催

人権問題に関する映画会が、5月1日(火)に基礎工学部国際棟シグマホールで開催されました。

この映画会は、人権問題啓発行事の一環として毎年行っているもので、今年度は人権問題全般について認識を深めってもらうため、次の2作品を上映しました。

- ①「メール」(同和問題、ホームページ上での人権侵害問題等)

- ②「桂文幅のふれあい人権塾」(人権問題全般)

午前・午後2回の上映で、教職員・学生など約70名の参加者があり、最後まで熱心に映画を鑑賞しました。

なお、当日は、上映に先立ち人権問題委員会委員による上映映画選定についての説明が行われました。

(総務部総務課)

体育会6賞および課外活動総長賞の表彰式開催

5月1日(火)のいちょう祭に体育会6賞、ならびに課外活動総長賞の表彰式が豊中のメインステージで行われました。あいにくの雨模様となってしまいましたが、受賞団体部員の他一般学生も多数集まって厳かな雰囲気の中、表彰式は行われました。

今回の体育会6賞は以下のクラブが受賞しました。

◆「赤堀賞」サイクリング部サイクルサッカー班

「赤堀賞」とは年間最優秀クラブに贈られる賞です。サイクルサッカー班は、関西学生春季・秋季ともにリーグ優勝、第37回関西学生インカレ優勝、第39回全日本学生インカレ優勝、W杯アジア大会7位という輝かしい成績を収めました。

◆「会長賞」フィギュアスケート部 梅谷英生さん

「会長賞」とは年間最優秀選手に贈られる賞です。フィギュアスケート部の梅谷英生さんは関西インカレ1位、全日本インカレ6位、第61回国民体育大会スケート競技会にて3位に入賞するなどの素晴らしい成績を収め、昨年に引き続きの受賞となりました。

◆「熊谷賞」フィギュアスケート部(女子)

「熊谷賞」とは年間最優秀女子クラブもしくは選手に贈られる賞です。フィギュアスケート部(女子)は、国公立大学フリースケーティング競技会団体優勝、関西学生氷上選手権大会、関西学生フィギュアスケート競技大会等で個人入賞者多数とすばらしい成績を収めました。

◆「釜洞賞」釣部

「釜洞賞」とは年間で最も特色のある活動を行ったクラブに贈られる賞です。釣部の部長である小林陽介さんはタイに行き、ギネスブックに載るほどの世界最重量級のメコン大ナマズとバラマンディを釣り上げることに成功しました。

◆「山村賞」自動車部

「山村賞」とは七大戦において顕著に活躍したクラブ、とりわけ前年度より著しく順位が上昇したクラブに贈られる賞です。自動車部は、前々回からの七大戦において、7位→4位→優勝と本学主管大会に合わせ、着実に順位を上げすばらしい成績を収めました。



◆「宮原賞」スキー部、硬式テニス部女子、空手道部、少林寺拳法部、剣道部男子、準硬式野球部、自動車部、ソフトテニス部男子、アーチェリー部

七大戦の本学主管を記念して、宮原総長から体育会五賞に新たに「宮原賞」を新設いただきました。「宮原賞」は、七大戦において優勝を収めた全てのクラブに贈られる賞です。今年度は上記9団体が受賞しました。

また、学生の課外活動の充実と更なる活発化を図ることを目的として、特に優れた活動を行った学生団体等を表彰するため、平成12年度に制定された「課外活動総長賞」は、広く本学的全課外活動団体(文化系・学部公認団体・非公認のサークル団体まで含めて)に公募を募り、選考の結果、以下の団体等が第8回「課外活動総長賞」を受賞しました。

- ・優秀賞：アーチェリー部、フィギュアスケート部、アマチュア無線クラブ、劇団ちゃうかちゃん
- ・特別賞：体育会、水泳部、テコンドー部、ボランティアサークル フロンティア

(学生部学生支援課)

茨木市と連携協力に関する協定締結

「地域に生き世界に伸びる」の基本理念のもと、地域・社会との緊密な連携を重要な目標として掲げる大阪大学は、北摂地域とのさらなる連携強化を図ることとして、吹田市、豊中市及び箕面市に引き続き、茨木市との間に、「連携協力に関する協定」を締結しました。調印式は、5月14日(月)に大阪大学から宮原秀夫総長ほか関係理事が、茨木市からは野村宜一市長ほか関係役職員が出席して、本大学事務局において行われました。

このたびの協定締結により、文化、教育・研究、国際交流及びまちづくり等の様々な分野において人的・知的資源の相互交流などの連携協力がより一層深まっていくことが期待されています。

なお、今後、池田市及び大阪市とも協議が整い次第、同様の協定を締結していくこととしています。



野村市長（右）と握手する宮原総長（左）

(総務部総務課)

基礎工学研究科・基礎工学部初任教員研修会実施

基礎工学研究科・基礎工学部では、5月14日(月)に「平成19年度基礎工学研究科・基礎工学部初任教員研修会(初任者FD)」を同研究科会議室(A棟2階)において実施しました。

この研修会は、新たに赴任され基礎工学研究科・基礎工学部の教育研究を担当する教員を主な対象に、大阪大学・大学院基礎工学研究科・基礎工学部の現状についての認識

を深めるとともに、併せて大学教育を担当する教員として、教育に関する力を高めることを目的として平成15年度から実施しているものであり、今年度の研修会には、大学院基礎工学研究科、大学院情報科学研究科及びナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構から26名の教員(教授6名、准教授4名、講師1名、助教15名)の参加がありました。

当日は、鈴木直理事・副学長による「大阪大学の教育・研究の目標と運営の方針」の講演に始まり、畑田耕一本学名誉教授(元本学副学長)による「大阪大学の歴史」の後、西田正吾研究科長による「基礎工学部の概要」、佐藤宏介教授による「基礎工学部の教育」、北山辰樹教授による「基礎工学部の入試」、飯國洋二教授による「セクハラ・アカハラ防止の重要性」と続き、最後に大澤真一事務長による「施設の適切な管理運用等」と「大阪大学と基礎工学研究科の事務処理」についての説明が行われました。

参加した26名の教員は、受講生という立場でメモを取りながら熱心に聞き入りました。

(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)



講演を行う畑田名誉教授

第2回大阪大学北米地区同窓会開催

昨年1月にサンフランシスコにて行われた第1回に続き、5月19日(土)にニューヨーク市内のコーネルクラブにて、第2回北米地区同窓会が40数名の参加者を得て開催されました。

谷本親伯サンフランシスコ教育研究センター長司会のもと、宮原秀夫総長の挨拶で始まった同会は、同窓会連合会代表幹事である鈴木直理事・副学長による「大阪大学の近況と同窓会連合会」と題する講話の後、山本敬司北米地区同窓会会長が議長となり、幹事の選任、事業報告及び事業計画等を審議する第2回総会が行われました。その後、橋本日出男理事・国際交流推進本部長の司会により、本学法学部卒業生である神余隆博特命全権大使・国連代表部次席



神余大使による特別講演

代表による「国連の現状と日本の役割」と題した特別講演が行われ、外交の第一線で活躍される同大使の言葉に一同感銘を受けました。



集合写真

引き続き、北米同窓生と総長との交流会として総長主催によるレセプションが行われ、同窓生は同じ北米にて活躍する者同士、大いに交流を深める一方、総長をはじめとする本学からの来賓と忌憚ない意見交換も行われ、西海岸での第3回同窓会での再会を約し成功裡にお開きとなりました。また、同会（Osaka University North American Alumni Association）は、寄付金の税額控除が可能なNPO法人としてカリフォルニア州に登録されており、参加者からは多くの寄付が日米の学生交流の推進等のために寄せられました。

（研究推進・国際部国際交流課）

理学研究科・理学部セクシュアル・ハラスメントに関する研修会実施

理学研究科・理学部においては、平成12年から毎年、新人教職員・学生を対象として「理学研究科・理学部セクシュアル・ハラスメントに関する研修会」を行っております。

理学研究科・理学部では、教育研究活動で十分な成果を上げ、社会的使命を果たしていくために、男女の区別なく、全ての者が互いに尊敬し合い、対等にコミュニケーションを行い、平等に能力を発揮し、協力し合う環境の整備が必要と考えております。この環境整備の一環として、セクシュアル・ハラスメントの防止等に関する規程を設け、



理学研究科等セクシュアル・ハラスメント対策委員会並びに部局相談員を置き、セクシュアル・ハラスメントの防止に研究科・学部を挙げて取り組んできております。

本年度は、5月22日(火)に周藤由美子氏、5月24日(木)には青木あさ代氏、の2名の大阪大学セクシュアル・ハラスメント専門相談員を講師としてお招きし、「セクシュアル・ハラスメントの理解と対応」と題した内容でD501講義室を会場として講演を頂きました。

研修当日は、金澤 浩理学研究科等セクシュアル・ハラスメント対策委員会委員長の司会により、小谷眞一研究科長、東島 清副研究科長の挨拶があり、引き続き各講師に講演をしていただきました。講演内容は、各講師が相談を受けられている現在の立場から、具体的なケースを想定した題材を基に、研修参加者に意見を求めながら、具体的にセクシュアル・ハラスメントを防止するために知っておかなければならないことや、セクシュアル・ハラスメントの被害に遭った場合の相談体制等についてでありました。

両日で約300名の参加者があり、非常に熱心に聴講する姿が多数見られ、セクシュアル・ハラスメントの防止に対する意識を高めることができました。

（大学院理学研究科・理学部）

次期総長候補者の選考

(トピックスからの続き)

5月10日の第1次意向投票では、各部局において投票が行われた後、総長選考会議において次の8名が第1次候補者として選出されました。

〈第1次候補者（五十音順）〉

- 馬 越 佑 吉（理事・副学長）
- 小 谷 真 一（理学研究科長）
- 近 藤 博 之（人間科学研究科長）
- 鈴 木 直（理事・副学長）
- 遠 山 正 彌（医学系研究科長）
- 内 藤 林（工学研究科教授）
- 米 田 俊 之（歯学研究科長）
- 鷲 田 清 一（理事・副学長）



コンベンションセンター2階の投票会場

また、6月4日にコンベンションセンターにおいて、第1次候補者について第2次意向投票が行われ、3回目の投票で、鷲田理事・副学長が過半数の376票を得ました。続いて開催された総長選考会議において同人を総長候補者に決定しました。

(総務部総務課)

麻疹（はしか）の感染拡大防止のために（緊急のお願い）

関東を中心に麻疹の感染が拡大していることはご存じだと思います。

本学においても感染の疑いがある者が確認されていますので、学生みなさんにも感染の恐れが十分あり警戒が必要です。つきましては、学生みなさんに下記のことを緊急でお願いします。

麻疹に感染すると、自分だけではなく周りの友達にも感染させてしまう可能性がありますので、みなさんのご理解、ご協力をお願いします。

保健センターでは、麻疹の感染等に関する情報収集の窓口となっていますので、下記の2、3に該当する場合には、必ず届け出てください。

麻疹（はしか）が大流行しています

- ◆ 麻疹（はしか）は大人にも感染します！
- ◆ 麻疹（はしか）の感染力は強力です（空気感染・飛沫感染・接触感染）！
- ◆ ウイルスに感染後10日前後の潜伏期間を経て発症します！
- ◆ 高熱、咳、鼻汁など風邪症状が2～4日続いた後、全身に赤い発疹（はっしん）が広がり、時に肺炎や脳炎など重症化する場合があります！

予 防 策

- ◆ うがい・手洗いを励行しましょう！
- ◆ 予防接種を受けていない方は医療機関で予防接種を受けましょう！
- ◆ 上記症状がある場合、無理をして登校・出勤せず、医療機関を受診しましょう！
- ◆ 発疹（はっしん）は後で現れますので、発熱のみの場合にも十分注意しましょう！

平成19年5月
大阪大学

記

- 1 全学生はアンケートに必ず答えること
○KOANにログインし、アンケート（一般）「麻疹（はしか）の感染拡大防止のために」に必ず答えてください。
- 2 登校前に37.5℃以上の発熱がある場合
○原則として登校しないでください。
○また、近隣の医療機関を受診してください。
○登校後、学内で体調不良を感じたら直ちに本学保健センターを受診し、その指示に従ってください。
- 3 登校前に38℃以上の発熱や発疹など麻疹を疑わせる症状がある場合
○直ちに近隣の医療機関を受診し、麻疹感染の可能性について診断を受けてください。
○また、速やかに保健センター（TEL：06－6850－6038）にそのことを届け出て、指示があれば従ってください。

(保健センター、安全衛生管理部)

看護学教師としての学びの軌跡 — 看護学自立の過程で —

大学院医学系研究科教授 小笠原 知 枝

最終講義の基本的な流れは看護学の自立に向けて働いた生涯であったことを話した。看護学が大学の中で、学問研究、教育の一分野として認知されるようになったのは、最近のことである。ここに至る過程に、どのような問題、苦労があったのか、私自身の看護とのかかわりを例に、次のようなことをトピックにして具体的に話をした。1) 看護にかかわった頃、2) 仕事をしながら大学で勉強、3) 聖路加病院の臨床看護師として、4) アメリカに留学—看護学の勉強、5) 日本の大学に就職して、6) 日本の大学院で心理学研究法の習得、7) 看護学教員としての自覚、8) 大阪大学に移って—看護学の自立に向けて。



大阪大学での主な研究活動については、「体験知に基づく個別の実習指導論」「がん患者の痛みの質的評価に基づく測定尺度の開発」「ボディイメージ障害の診断指標に関する妥当性研究」「がん末期患者のターミナルケアとバリアに対する家族の認知」などの研究概要とその成果を講義した。

最後に、後を担う学生たちには、自立した看護学の土台を確固たるものにすること、そして看護の現場を中心にボトムアップの研究の必要性を強調した。また、教員には教える内容よりも学ぶプロセスを重視してほしいことを強調した。

おがさわら・ちえ

プロフィール

略歴：昭和40年松山赤十字看護専門学校卒業、京都大学医学部附属病院看護部勤務。昭和45年同志社大学法学部卒業、聖路加国際病院勤務。昭和53年米国セント・スカラスティカ大学看護学部卒業、昭和54年静岡県女子短期大学講師。昭和61年静岡大学大学院教育学研究科修士課程修了、昭和62年名古屋大学医療技術短期大学部助教授、平成6年大阪大学医学部保健学科教授。平成8年名古屋大学にて医学博士の学位を取得。日本看護科学学会、日本看護研究学会、日本看護診断学会、日本看護教育学会等において理事、評議員を歴任。平成18年NANDA国際賞受賞。

食道外科・周手術期管理学と38年

大学院医学系研究科教授 城 戸 良 弘

1963年に阪大生となって40数年間大阪大学のお世話になった。

この間、外科学一般と食道がん・胃がんをはじめとする上部消化管外科の研究に従事してきた。主な研究の成果を列挙すると、食道外科の分野では、重篤な術後合併症の発生が高率であった食道がん手術成績を向上させる目的のために、術後の肺合併症の解明と術後栄養管理方法の確立に取り組み、手術成績の飛躍的な向上に貢献したこと。術後肺合併症の発生原因としての「消化液の誤嚥」の役割を明らかにし、人工呼吸や消化管の減圧などの対策や術後の代謝変動の臨床例での解明とその変動に対応した周手術期栄養管理方法を確立したこと。なかでも、術後早期の高カロリー輸液の糖質源としてグルコース、フルクトース、キシリトールを組み合わせた処方考案し、臨床的、基礎的研究によりその有用性と安全性を確認したことがあげられる。



さらに、周手術期管理学の研究に従事し、上部消化管がんや直腸がんの術後障害の研究面で大きな成果を得、術後患者のQOL向上に貢献したことである。退職するにあたって今後消化器外科患者の利益を向上させる研究が飛躍的に前進することを期待している。

きど・よしひろ

プロフィール

略歴：昭和44年3月大阪大学医学部医学科卒業、同年4月大阪大学医学部附属病院第二外科入局。昭和46年6月国立大阪病院外科医師、昭和49年4月大阪大学医学部附属病院医員、昭和52年7月医学部助手。昭和58年3月大阪大学にて医学博士の学位を取得。昭和63年12月医療技術短期大学部助教授、平成8年4月大阪大学医学部教授。
専門分野：食道がん・胃がんをはじめとする上部消化管外科分野と周手術期管理学。
所属学会：日本外科学会、日本外科代謝栄養学会、日本看護研究学会、日本看護科学学会、日本難病看護学会、日本医学哲学・倫理学会。

計算物理屋の40年

大学院工学研究科教授 広瀬 喜久治

素粒子物理から固体物理、精密加工現象、計測評価技術まで、広範囲にわたって理論物理と計算物理に関する研究を行ってきた。素粒子物理の分野では、格子ゲージ場理論でのモデルの提案とそれを用いた計算機実験による理論の検証、さらに素粒子多体系の多重発生機構を明らかにするための基本的な問題に取り組んできた。また、そのシミュレーション手法を基礎とした電子状態シミュレーション手法の開発に取り組み、実空間差分法の実用的アルゴリズムの開発に成功した。さらにこれを発展させることにより、ナノスケール構造体の電気伝導特性のシミュレーションに対して極めて有効な手法であるOBM (Overbridging Boundary Matching) 法を開発し、原子・分子ワイヤーの電気伝導特性に関する多くの知見を得ることができた。また、電子状態シミュレーションの工学的応用として取り組んだ、除去加工や薄膜形成などの表面反応を利用した精密加工プロセスの最適設計・制御および表面計測に関する研究においても新しい知見を得ることができた。今後も基礎理論、計算技術、高速コンピュータの発展は続き、電子状態シミュレーションの大規模化・高精度化・高速化が進むものと考えられる。計算物理屋たちの活躍の舞台は、ますます広がってゆくことだろう。



ひろせ・きくじ

プロフィール

略歴：昭和42年大阪大学工学部精密工学科を卒業後、大阪大学大学院理学研究科に進学、昭和49年博士課程修了。同年より帝国女子大学（現：大阪国際大学）講師。昭和51年大阪大学理学博士号取得。昭和57年帝国女子大学教授、平成7年より大阪大学工学部教授。平成10年同大学院工学研究科精密科学専攻教授として計算物理領域を担当した。研究テーマは、格子ゲージ場理論の数値シミュレーション、固体物理の基礎理論と電子状態シミュレーション、第一原理電子状態シミュレーションによる固体物性と固体表面反応など。精密工学会賞、精密工学会沼田記念論文賞を受賞。学内では入学試験制度委員会をはじめとする多くの委員会委員を、学外では精密工学会評議員、同学会関西支部長、同学会超精密加工専門委員会幹事等を歴任した。

マイクロ化学のサイエンスと生まれる研究新領域

— 4.5学部における42年間の研究 —

大学院工学研究科教授 増原 宏

レーザーは1960年に発明されたが、以後広範囲のサイエンスとテクノロジーの発展に貢献してきた。21世紀は光の時代と言われ、光科学技術がポストナノテクに位置づけられているのもレーザーあっての話である。化学の世界でもレーザー分光、レーザー科学の研究領域が開花し、化学研究のフロンティアを構成してきたが、80年代後半に顕微鏡技術と結びついて極微領域の光化学の時代が始まった。任意の微小空間に任意の時間だけエネルギーを注入し、計測、分光、反応、制御、加工を行うことができる方法を、われわれはレーザーを使うことなく実現することはできない。このレーザーと顕微鏡を駆使したマイクロ化学のテクノロジーは、チップ、デバイス、センサーからマイクロ化学プラントまでの応用新領域を生み出し、そのサイエンスはナノ次元の科学技術に新しい潮流を作り出しており、化学と物理はもちろん、材料、生物、機械、加工の分野と境界領域を形成している。本講義では、このような流れを押さえ、特に最近の研究課題であるナノ分光とナノ光化学、集光レーザービームの光圧を駆使したナノ操作と光圧化学、アブレーションナノダイナミクスとバイオ応用の研究を取り上げて紹介し、今後の進展を考えた。



ますはら・ひろし

プロフィール

略歴：昭和41年東北大学理学部化学第二学科を卒業、昭和43年東北大学理学研究科化学専攻修士課程を修了、昭和46年大阪大学大学院基礎工学研究科化学系化学専攻博士課程修了、工学博士。日本学術振興会特別研究員を経て、昭和47年4月基礎工学部助手、同59年2月同講師、同59年4月京都工芸繊維大学繊維学部高分子学科教授、平成3年2月大阪大学工学部応用物理学科教授、大学院重点化により平成7年より大阪大学大学院工学研究科教授。平成16年4月より生命機能研究科教授を兼務。この間昭和63年より5年間、ERATO増原極微変換プロジェクト総括責任者を務める。専門は光化学、マイクロ・ナノ分光、極微化学。光化学協会賞、LVMHダヴィンチ賞、大阪科学賞、日本化学会学術賞、光産業技術振興協会桜井賞、日本化学会賞、日本分光学会学術賞、ポーターメダル、エコールノルマル名誉学位など受賞。ベルギー王国フランダースアカデミー外国人会員。

都市代謝系エンジニアリングの変遷と課題

— エネルギーと環境の歴史の概観を通して —

大学院工学研究科教授 水 野 稔

都市は高密度の人間活動を可能にするため、オフサイト資源を都市に搬入する供給インフラ（サプライサイド）、廃棄物を片付ける処理インフラ（ディスポーズサイド）とそれらのサービスの享受者としての消費（デマンドサイド）からなっている。このシステムを生体になぞらえて代謝系と見ることができる。

現代都市の始まりを蒸気機関車による石炭の陸送を可能にした高圧蒸気機関開発解禁の1800年として、それ以後、サプライサイド技術が社会を牽引して、高度成長を実現してきた。これは、動脈系完備都市（第1世代代謝系）である。20世紀の後半は、供給ばかりの系により地域環境が悪化し、ディスポーズサイド（処理技術）が脚光を浴び、動脈・静脈系完備都市（第2世代）が理想とされた。今や、大量消費・大量廃棄の結果、地球環境問題が顕在化し、いまでもお客様視されてきたデマンドサイドの参加を中心とする系（第3世代）

が求められ、その持続可能化が問われている。これは、パラダイムシフトとも言える変化である。まとめとして、持続可能な第3世代の代謝系のライフサイクルエンジニアリングがキーワードであり、ここにおけるデマンドサイドシステム技術の確立が課題である。



みずの・みのる

プロフィール

略歴：昭和41年大阪大学工学部機械工学科卒業、昭和43年同大学院工学研究科機械工学専攻修士課程修了、昭和46年同博士課程単位修得退学、同年大阪大学助手工学部環境工学科、昭和47年同講師、昭和51年同助教授を経て、平成元年同教授同環境熱工学講座担当、平成10年大阪大学教授大学院工学研究科環境工学専攻環境システム学講座環境エネルギー工学講座担当、平成17年から同教授環境・エネルギー工学専攻共生エネルギーシステム講座都市エネルギーシステム領域担当。沸騰熱伝達、ヒートアイランドの成因・対策、人間・熱環境システムの構造、未利用エネルギー活用システム、空調システムの総合評価などの研究を通して、都市エネルギーシステムの適正化を課題としてきた。大阪府環境審議会委員、(財)地球環境センター評議員、(財)建築総合試験所評議員、大阪ヒートアイランド対策コンソーシアム理事長などを歴任。学会関係では、空調冷凍学会理事、給排水設備研究会関西支部長、空気調和・衛生工学会近畿支部長、空気調和・衛生工学会理事・副会長・会長を歴任。空気調和・衛生工学会論文賞6回、空気調和・衛生工学会功績賞などを受賞。

生体系高分解能核磁気共鳴法の未来

蛋白質研究所教授 阿久津 秀 雄

私が大学院に進学した頃はWatson-CrickによるDNA二重らせん構造モデルの提案が全く新しい生命科学を切り開きつつあった。その影響を受けて、私は分子構造を基礎に生命を理解したいと思い、核磁気共鳴法（NMR）を主要な手段として生体系の構造と機能の研究に取り組んできた。その主な対象は生体膜を中心とする生体超分子系である。35年前、核磁気共鳴法を用いてこのような研究を行うことは不可能に近かったが、測定技術の画期的な進歩と研究法の発展によって攻略可能な対象となった。われわれは溶液NMRと固体NMRを併用し、それぞれの測定・解析法を開発することにより、プロトンATP合成酵素のような巨大な膜タンパク質の構造・機能解析を行った。溶液NMRではインテンを用いた区分標識法を導入することにより、分子量52,000のβサブユニット、さらには350,000のα₃β₃γ複合体を解析の対象とし、βサブユニットの構造変化がこの酵素が回転する重要な駆動力となることを示すことができた。また、固体NMRによるタンパク質構造解析法を開発し、この蛋白質の膜に埋まった部分の研究をも可能にした。この方法は光合成細菌の巨大な集光オルガネラの原子構造をも明らかにした。



あくつ・ひでお

プロフィール

略歴：1967年東京大学理学部生物化学科卒業、1969年同大学院理学系研究科生物化学修士課程修了、1972年同博士課程を単位修得退学し、同年大阪大学蛋白質研究所京極好正教授の下で助手としてNMRの研究を始める。1973年理学博士（東京大学）。学位論文はリン脂質累積膜の赤外二色性による構造解析。1978年日本学術振興会特定国派遣研究者としてスイスバーゼル大学のSeelig教授の下に留学し、リン脂質膜の固体NMRの研究を行う。1979年EMBO長期研究者として研究を継続。1980年蛋白質研究所助手に復職。1985年横浜国立大学工学部助教授に昇任。電子伝達蛋白質のNMRによる解析に取り組む。1991年同教授に昇任。固体NMR装置を導入し、蛋白質の固体NMRによる解析法の開発に取り組む。2000年大阪大学蛋白質研究所教授。溶液、固体NMRを用いたプロトンATP合成酵素のような大きなシステムの解析に取り組む。2004年蛋白質研究所長、2006年バイオ関連多目的研究施設長。

春の叙勲

平成19年度の春の叙勲受章者が発表され、本学関係の受章者は次の方々です。

岩 田 平太郎	(名 誉 教 授)	瑞宝重光章
島 津 忠 夫	(名 誉 教 授)	瑞宝中綬章
福 岡 富 子	(元医学部附属病院看護部長)	瑞宝双光章
三 吉 貞 人	(元工 学 部 事 務 部 長)	瑞宝双光章

藤本ゆかり講師「有機合成化学奨励賞」受賞

大学院理学研究科化学専攻の藤本ゆかり講師が、社団法人有機合成化学協会から「2006年度有機合成化学奨励賞」を授与されました。同賞は、有機合成化学および工業に貢献する優れた研究を行った若手研究者に対して授与されるもので、2006年度で25回目にあたります。

今回の受賞は、藤本講師の「生体内の情報伝達に関わる鍵化合物の合成と機能解析」に関する業績に対して与えられたもので、これまで藤本講師が行ってきた自然免疫機構を活性化する細菌由来複合糖質の合成と機能解析、及び視覚情報伝達に関わる光受容体のリガンドについての光学活性類縁体合成と配座解析の研究が評価されたものです。

授賞式は2月22日(木)にKKRホテル東京で行われ、賞状と、協会初代会長であった真島利行博士(第三代大阪帝国大学総長)の肖像のメダルが贈られました。

(大学院理学研究科・理学部)



寺尾 潤助教「三井化学触媒科学奨励賞」及び 「文部科学大臣表彰若手研究者賞」受賞

大学院工学研究科附属原子分子イオン制御理工学センターの寺尾 潤助教が、三井化学触媒科学奨励賞を本学で初めて受賞しました。この賞は化学および化学産業の持続的発展に寄与し、触媒科学の分野で優れた研究業績をあげた研究者（満35歳以下）の個人に授与されるものであり、授賞式および受賞講演は3月14日(水)に三井化学触媒科学国際シンポジウムにおいて、ノーベル化学賞受賞者である Jean-Marie Lehn 教授、R. H. Grubbs 教授、R. R. Schrock 教授らの基調講演および特別講演とともに行われました。今回の受賞は、寺尾助教の「陰イオン性遷移金属錯体を鍵触媒中間体とする炭素結合生成反応」における業績が、アニオン性錯体の反応特性を活用し、これまで困難とされてきた分子変換を含む炭素-炭素結合形成の新手法を創出したとして評価されました。

また、寺尾助教は、「有機合成分野における遷移金属による新規触媒反応の開発研究」における業績により、文部科学大臣表彰若手研究者賞を本研究科教員として初めて受賞しました。この賞は萌芽的な研究、独創的視点に立った研究等、高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績をあげた若手研究者個人（40歳未満）を表彰するものであり、4月17日(火)に虎ノ門パストラルにて表彰されました。

(大学院工学研究科・工学部)



三井化学触媒科学奨励賞盾



文部科学大臣表彰若手研究者賞授賞式

平成18年度第2学期共通教育賞表彰式挙行

大学教育実践センターでは、5月23日(水)に事務局301会議室において平成18年度第2学期大阪大学共通教育賞の表彰式を行いました。

この大阪大学共通教育賞は、全学共通教育の授業を担当する本学教員及び非常勤講師を対象として、優れた授業を実践した教員、優れた教科書等を著した教員、優れた著述を行った教員、並びに全学共通教育の実施運営に顕著な功労のあった教員を表彰することによって、共通教育の質的向上を図ることを目的に平成14年度に制定されたもので、今回が10度目の表彰となりました。この顕彰制度は教育評価の先駆的な試みとして、本学の教育の発展に寄与することが期待されています。

今回の共通教育賞の選考は、全学の教員及び学生を対象に行ったアンケート結果に基づき、選考委員会が、教育上の多大な努力や優秀な教育技術等を総合的に評価した結果、12名の教員が選出されました。

表彰式では、宮原秀夫総長から表彰状と記念品の授与が行われ、高杉英一大学教育実践センター長、眞鍋昭治郎副センター長、佐々木順司理事・事務局長、和田榮史事務長も列席し、受賞者を祝福しました。

(大学教育実践センター)



平成18年度第2学期 大阪大学共通教育賞受賞者一覧

氏 名	所 属・職 名	氏 名	所 属・職 名
遠 藤 久 顕	理学研究科 准教授	Aumann Oliver	言語文化研究科 外国人教師
打 越 純 一	工学研究科 助教	橘 木 修 志	生命機能研究科 准教授
岩 根 久	言語文化研究科 教授	岩 居 弘 樹	大学教育実践センター 教授
中 直 一	言語文化研究科 教授	山 成 数 明	大学教育実践センター 教授
井 元 秀 剛	言語文化研究科 准教授	平 井 富 弘	大学教育実践センター 招へい教授
日 野 信 行	言語文化研究科 准教授	渡 邊 太	非常勤講師

榊引俊宏特任講師（常勤）「第31回レーザー学会奨励賞」受賞

大学院工学研究科附属フロンティア研究センターの榊引俊宏特任講師（常勤）が、「第31回レーザー学会奨励賞」を受賞しました。

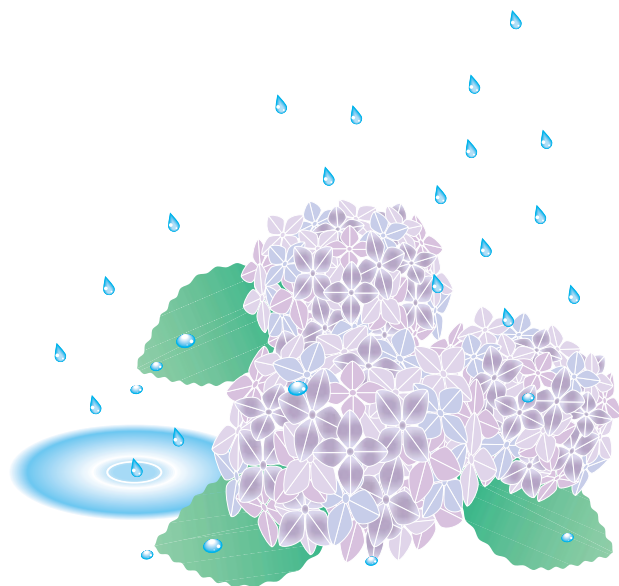
第31回レーザー学会奨励賞は、レーザーに関する研究で、きわめて示唆的かつ独創的で、かつ将来性のあるものに対して贈呈されるものです。

今回の受賞は、『レーザーによる生体幹細胞の分化制御とそのメカニズム』に関するものです。赤外、可視光、紫外などの広範な領域のレーザー光を用いた幹細胞の細胞・組織への「分化指示」とそのメカニズムの解明だけではなく、種々の細胞・組織にむけた幹細胞の分化制御をレーザー技術により行なっており、再生医療実現化へのブレークスルーとなるレーザー技術を創成、提案していることが評価されました。

なお、授賞式はレーザー学会第35回通常総会中の5月31日(木)に、ホテル阪急エキスポパーク（吹田市）において行われました。



（大学院工学研究科・工学部）



新教授紹介

竹 田 潔 (たけだ きよし)

大学院医学系研究科



【略歴】

- 平 4. 3 大阪大学医学部医学科卒業
- 4. 6 大阪大学医学部附属病院医員
- 5. 6 公立学校共済組合近畿中央病院医員（平成6年3月まで）
- 10. 3 大阪大学大学院医学系研究科博士課程修了
- 10. 4 兵庫医科大学助手
- 11. 4 大阪大学助手微生物病研究所
- 15.12 九州大学教授生体防御医学研究所
- 19. 4 大阪大学教授大学院医学系研究科

所 属：大学院医学系研究科感染免疫医学講座
（免疫制御学）

専門分野：免疫学

森 勇 介 (もり ゆうすけ)

大学院工学研究科



【略歴】

- 平元. 3 大阪大学工学部電気工学科卒業
- 3. 3 大阪大学大学院工学研究科電気工学専攻博士前期課程修了
- 5. 3 大阪大学大学院工学研究科電気工学専攻博士後期課程退学
- 5. 4 大阪大学助手工学部
- 8. 3 博士（工学）（大阪大学）
- 10. 4 大阪大学助手大学院工学研究科
- 11. 5 大阪大学講師大学院工学研究科
- 12.10 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院工学研究科
- 19. 5 大阪大学教授大学院工学研究科

所 属：大学院工学研究科電気電子情報工学専攻創製エレクトロニクス材料講座

専門分野：機能性材料工学

東風西風

研究者と鮭

菊地靖志



今のような集団住宅で妻と二人の生活を送るようになって約10年になりますが、このような生活スタイルになることは学生時代には予想できませんでした。というのは東北地方（福島市）生まれで、当時のごく当たり前の事でしたが大家族（5人兄弟（妹）＋父母＋祖父母と9人同居（時には親戚も＋））でしたから、みんな揃っての夕食時などはとてもにぎやかでした。秋から冬になるとおかずの一品に鮭が出たことを思い出します。焼いた切身には一面に白く塩が吹き出していて思い切り塩味が効いていました。今は季節を問わず入手できますし、甘塩のものが多いようです。北

の海でたくましく成長した鮭は生まれた川に産卵のために帰ってくるといいます。どのような方法で大海から自分の生まれた北海道や東北等の河川を識別して帰ってくるのかは詳しくは判っていないそうです。

このような鮭の行動様式と比較するのはどうか？と思うのですが、似たような研究の歩みをみせる先輩・同輩の方々を時々おみかけします。若い時期（たとえば学部生・院生）に指導者から受けた影響、即ち研究に対する“アプローチの仕方”、“深く掘り下げて考える習慣”、“文献を読み込む力”等々は学生にとっては鮭の場合と同様に“生まれた川”なのでしょうか？一人前になるための準備期間を経て就職したり大抵の人生は“川”を去り、新しい職場の要求に応じて研究テーマや仕事の内容が変化致します。一方、ここでいよいよ研究者・技術者等として自立し成長していくことにもなります。10～15年と年月が過ぎ、自分でテーマを選択したり、探索し新しい分野を開拓、担当できるような立場となり、その人の研究者としてのカラーのようなものが出せるようになると自分の生まれた“川”の香りが蘇ってくるのでしょうか？指導する立場となつてからの研究手法にかつて学んだ研究姿勢の面影を見出すことがあります。そのような研究手法が新しいテーマになじむのかと心配に思うのですが決してそんなことはなく、むしろ斬新で新しいテーマを追求する上で良くマッチしていて興味深い結果を得ていることがあります。このことは院生等にとっては“生まれた川”での勉強が大変重要であること、そこで質の高い内容のトレーニングをしっかり受けていたのだな、などと私は勝手に考えています。

文献等を調べていて、あの方は以前こんな研究をやっておられたのかと驚き、かつその手法が最近の研究にも生かされているのに気付き感心したりです。研究者としての長い道程を鮭の行動様式と短絡的に重ねてしまって大変恐縮です。皆さんはいかが思われますか？

それにしても大学院博士後期課程の諸君の就職の困難さの改善や返済義務のない奨学金制度の復活など安心して研究に打込める環境が充実される改革を望みます。

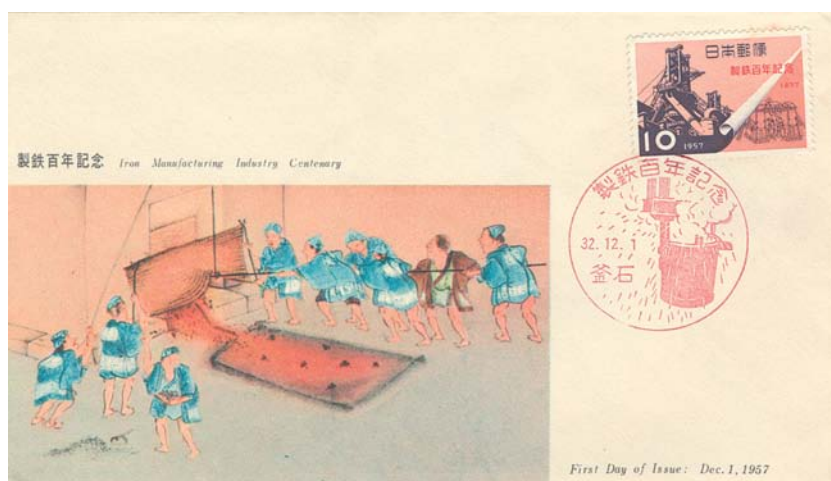
定年後、適塾研究会に参加いろいろな講義を聞いております。適塾に関連したエピソードの充実した内容ですのでとても楽しみです。都合で欠席しなければならない時など誠に残念に思います。当時全国か

ら多くの人々が門を叩いたことで知られています。私の郷里からはどうかと梅溪昇先生の本で調べてみると東北6県から合計28人です。西日本に比べると非常に少ないです。江戸までは出て箱根を越えるのは当時もなかなか困難だったのかもしれませんが。この中で南部藩（岩手県）から入門した一人が大島高任です。後に我国で初めて高炉を建設して銑鉄の生産に成功した人物です。オランダ医学を修めた奥医師の子として生まれた高任は江戸、長崎で蘭学および医学修行をし、1849年に適塾に入門し、3年1ヶ月在籍したと記録にありますが塾で熱心に勉強したというわけではないらしく、在阪中の行動の詳細ははっきりしていません。医学よりもそれ以外の学問に興味をもったのではないのでしょうか。帰藩してからは御鉄砲方となり医学から離れているようです。反射炉の築造を指導する。この炉で使用する銑鉄を大量に生産する目的で高炉の建設を強く進言し、1857年釜石近くの大橋という地で大橋高炉を築き銑鉄の生産に成功したわけです。その後も国内各地の鉱山の技術指導に尽力しています。1895年（69才頃か）那須でブドウ園を開きブドウ酒の醸造も手がけています。鉱業界だけでなく広く活躍しました。時の政府は鉄は国家なりの国策をとり官営製鉄所を設立することを決定しました（1896年）。立地調査の結果筑前の八幡村に建設することになります。この製鉄所の初代技監に大島道太郎が就任しました。彼は高任の長男で、海外留学の経験をもつ冶金学者です。欧米の製鉄事情を視察した後、ドイツの製鉄技術を導入して製鉄所を建設します。現在の新日本製鉄八幡製鉄所です。親子二代の冶金学者ということになります。我国の鉄鋼業の技術水準の高さは周知のとおりで、自動車製造をはじめ物づくりを支えています。

もう、私の言いたいことはお判り頂けたことと思います。高任が始めた釜石大橋日本式高炉から150年、我が国の近代製鉄のルーツは本学・適塾にありと言いたいのです。近代製鉄100年記念で発行された（1957年）切手の初日カバーを載せて頂きました。右上の高炉と左下の構造を比べて下さい。

最後に適塾研究会のお世話を下さっている芝哲夫先生（名誉教授）はじめ皆さんへ感謝致します。

次の本を参考にしました。梅溪昇著緒方洪庵と適塾、南部の科学・技術展示品解書（盛岡中央公民館）、半沢周三著日本製鉄事始、佐木隆三著宿老・田中熊吉伝



望月和子名誉教授(基礎工学部)逝去



本学名誉教授望月和子先生は、平成 19 年 2 月 22 日(木)急性硬膜下血腫のため逝去されました。享年 78 歳でした。

先生は昭和 28 年 3 月に大阪大学理学部物理学科を卒業され、その後、同学科の教務職員、助手を経て、昭和 39 年 1 月には基礎工学部物性物理工学科助教授に就任されま

した。この間、昭和 34 年 4 月には、理論物理分野では女性として国内初の理学博士になられました。その後、昭和 60 年 5 月に教授に昇任されましたが、大阪大学では初めての女性教授誕生でした。

先生のご専門は物性理論で、磁性、超伝導等を含む電子物性の広い分野において卓越した業績をあげられ、物性理論分野の発展に大きく貢献されました。昭和 37 年に「磁性体の理論的研究」で朝日文化賞を共同受賞され、昭和 47 年には「磁性体の光学的性質の研究」で服部報公賞を受賞されています。また、優れた教育者として後進の育成に情熱を傾けられ、学界並びに産業界に多くの優れた人材を送り出されました。

当然のことながら女性研究者の問題への関心は高く、最近では国際高等研究所作業部会「女性研究者と科学の未来」のメンバーとして精力的に活動されていました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)

佐藤正次名誉教授(教養部)逝去



本学名誉教授佐藤正次先生は、病氣療養中のところ平成 19 年 3 月 13 日(火)逝去されました。享年 80 歳でした。

先生は、昭和 23 年 3 月大阪帝国大学理学部数学科を卒業後、同大学理学部に採用され、昭和 28 年 4 月助手、昭和 28 年 7 月講師に昇任し、昭和 32 年 12 月同大学理学博士の学位を授与されました。昭和 36 年 5 月分校助教授、昭和 38 年 4 月教養部勤務となり、同年 9 月教授に昇任され、平成 2 年 3 月に停年退官されました。退官後は摂南大学工学部特任教授を勤められ、教育・研究に情熱を傾けてこられました。

先生は代数学における束論および群論の研究に従事し、優れた研究成果を上げるとともに、永年にわたって、一般

教養の数学の講義をはじめ、理学部における専門講義および大学院における研究指導を担当し、多くの優秀な人材を社会に送り出し、日本の数学研究水準の高度化に寄与されました。ことに新制大学の初期の時代から、自ら教科書を執筆・編纂して教養教育の指針を示し、教養部内において会計委員会委員を長期にわたって務めるなど、大学における一般教養教育の整備拡充と向上に努めたことは大きな功績であります。また、評議員として大阪大学の運営に参画するとともに、各種委員および委員長を歴任し、昭和 53 年 8 月から昭和 57 年 8 月まで教養部長を務められ、大阪大学の発展に尽力されました。昭和 58 年 9 月から平成元年 8 月まで文部省大学入試センター運営協議員を務めるなど文部行政にも多大の貢献をされました。

先生はまた、海外の良質な数学書を翻訳して数学図書の充実と数学教育の向上に努め、日本数学会評議員として学会活動も精力的に行われ、日本の数学の発展に大いに貢献されました。

以上のように、先生の永年にわたる研究教育活動は、学問の進歩発展、大学教育の充実、社会の基盤となる人材育成に大きく貢献したとして、平成 17 年、瑞宝中綬章を授与されています。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学教育実践センター)

高 忠雄名誉教授(基礎工学部)逝去



本学名誉教授高 忠雄先生は平成 19 年 3 月 18 日(日)、
膵(すい)癌のため逝去されました。享年 77 歳でした。

先生は昭和 38 年本学大学院工学研究科博士課程修了後、
本学工学部助手に採用され、同助教授を経て、昭和 41 年
基礎工学部教授、その後、評議員、基礎工学部長として大
阪大学の発展に尽力されました。平成 4 年奈良先端科学技
術大学院大学教授に配置換えとなりましたが平成 6 年 3 月停
年まで本学教授を併任されました。この間、永年にわたり

教育、研究並びに後進の育成に情熱を傾け、情報科学の重
要な基礎理論の発展に大きく寄与するとともに、学界並び
に産業界に多くの優れた人材を送り出されました。

研究者としては、符号理論とその応用の分野で、世界に
おける主導的役割を果たして来られました。さらに形式言
語理論をはじめ、情報科学の多くの分野でも優れた先駆的
業績をあげられました。業績には、30 数年後になって携
帯電話の国際標準に採用された符号や RNA 系列の解析へ
応用されたアルゴリズムなど、実用的にも極めて重要な成
果が多く含まれています。これらの業績に対して、IEEE
情報理論ソサエティから、情報理論分野における世界で
最も権威ある賞である Claude E. Shannon Award (シャノ
ン賞)を 1999 年に授与されるなど、多数の賞を受賞され
ました。

高先生はお亡くなりになる直前まで、若手研究者の育成
に真に腐心されておられました。本学における情報科学・
システム科学分野の若手育成のため、高賞設立の準備も進
んでいる中、突然のことで残念でなりません。ここに謹ん
で哀悼の意を表します。

(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)

難波 進名誉教授(基礎工学部)逝去



本学名誉教授難波 進先生は、平成 19 年 4 月 2 日(月)、
骨髄異形成症候群のため逝去されました。享年 79 歳でした。

先生は、昭和 25 年大阪大学工学部通信工学科を卒業し、
(株)科学研究所(後に理化学研究所に改組)に入所、昭
和 41 年主任研究員に就き、半導体工学研究室を主宰され
ました。転じて昭和 42 年 11 月大阪大学基礎工学部教授(電
気工学科電気工学基礎理論講座担当)に就任され、平成 3
年 3 月に停年退官されました。この間、本学の極限微細ビ
ーム加工実験施設長、極限物質研究センター長を歴任され
ました。その後、平成 16 年まで長崎総合科学大学教授を

務められました。

先生は、一貫して電子・イオン・光を用いた微細加工の
研究を行い、先駆的な業績を挙げられました。イオン注入
法の研究では、その高い制御性を実証し、半導体 IC 製作
プロセスへの適用を推進されました。今日の VLSI の不純
物添加は、すべてイオン注入法で行われるまでに定着して
います。

電子ビーム微細加工の研究は、先生が最も情熱を注がれ
たもので、解像度 10nm 以下のリソグラフィーに結実しま
した。これを駆使して極微構造やメゾスコピック系を対象
とする研究領域を開拓し、ナノエレクトロニクス概念を
提唱されましたが、これは世界的なナノテクノロジーの潮
流に遙かに先行するものでした。

また先生は、我が国におけるレーザー工学の先駆者のひ
とりで、その発明直後から研究に携わり幾多の成果を挙げ
られ、分野の発展に貢献されました。

これらの功績により、瑞宝中綬章、紫綬褒章をはじめ最
近の IEEE Cledo Brunetti 賞まで多数の表彰や IEEE、OSA
などの学会のフェロー、名誉会員の称号を受けられました。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)

大阪大学未来基金を創設

大阪大学では、大学の財政基盤を強化し、将来の教育研究活動のより一層の充実を図ることを目的に「大阪大学未来基金」を創設しました。

寄付金は、「社会貢献、国際交流、学生支援、施設整備」のほか、任意の目的を用途として指定いただくことができます。

大阪大学卒業生、教職員OBを始め、一般の皆様方からの、未来基金へのご協力をお願いします。

問い合わせ先：

大阪大学未来基金事務局（大阪大学後援会内）

〒565-0871 吹田市山田丘1-1

TEL：06-6877-9852

E-mail：miraikikin@star.jim.osaka-u.ac.jp



（総務部総務課）

公開シンポジウム「小学英語教育はいかにあるべきか」

日 時：7月1日(日) 13:00～17:00

場 所：大阪大学中之島センター 佐治敬三メモリアルホール

13:00～13:40 基調講演「小学英語教育の軌跡と展望」

高梨庸雄（京都ノートルダム女子大学教授・小学校英語教育学会顧問）

13:40～14:30 招待講演「今後の英語教育と国際理解教育」 手塚義雅（文部科学省初等中等教育局国際教育課長）

14:40～17:00 シンポジウム「小学英語教育はいかにあるべきか」

コーディネータ・講演：「小学英語教育を巡る論議の誤謬と責任」

成田 一（大阪大学大学院教授・英語教育総合研究会代表）

講演：「世界における小学英語教育の潮流」

大谷泰照（名古屋外国語大学教授・大阪大学名誉教授・大学英語教育学会顧問）

講演：「バイリンガルの習得から見た小学英語教育」

山本雅代（関西学院大学大学院教授・異文化間教育学会理事）

講演：「小学英語教育実践状況の報告と問題点」

田縁真弓（立命館小学校英語科アドバイザー）

コメンテータ：高梨庸雄、手塚義雅

定 員：180人 参加費：700円

対 象：教員ほか社会人、学生

主 催：英語教育総合研究会

共 催：大阪大学大学院言語文化研究科

後 援：読売新聞社、大阪府教育委員会、兵庫県教育委員会

問い合わせ先：大阪大学大学院言語文化研究科 成田研究室 email: narita@lang.osaka-u.ac.jp

（大学院言語文化研究科）

人権問題に関する講演会のお知らせ

人権問題に関する啓発行事の一環として、講演会を以下のとおり開催します。
今回は、セクシュアル・ハラスメント問題をテーマとして取り上げます。
近隣地域の方々にも多数ご参加いただきますようご案内いたします。

- 日 時 平成19年7月20日(金) 10時00分～11時30分
- 会 場 大阪大学蛋白質研究所 本館1階講堂
- 講 師 石 元 清 英(関西大学社会学部教授)
- 演 題 「キャンパス・セクシュアル・ハラスメントの現状と対策
—大学における人権保障の取り組みについて考える—」
- 問い合わせ先 大阪大学総務部総務課総務係 (TEL: 06-6879-7014)

(総務部総務課)

今年も出航します「天神祭」船渡御

日本三大祭の一つ「天神祭」の船渡御に「阪大船」が今年も参加します。
船渡御は、天神祭のクライマックスを彩り、大川を百隻あまりの船が行き交う、大阪の夏の風物詩として有名です。また大阪大学も今年で3度目の出船で夏のイベントとして定着してきました。

今年も、大阪外国語大学との統合を10月に控え、「大きく生まれ変わります 大阪大学」をキャッチフレーズに「阪大船」の装いも新たに、その勇姿を大川の川面に浮かべることになりました。大学教職員、学生、同窓生等「阪大ファミリー」の皆様方に乗船いただき、水の都の夏の夜に、かけ声も高らかに大阪大学をアピールする一大イベントです。

【日 時】7月25日(水) 午後6時～

【問い合わせ先】詳しくは下記までお問い合わせ下さい。

大阪大学天神祭実行委員会(大阪大学総務部総務課)

TEL: 06-6879-7013

FAX: 06-6879-7008

E-mail: KANENO-T@star.jim.osaka-u.ac.jp



昨年の船渡御の様子

(総務部総務課)

大阪大学基礎工学部 第29回公開講座
「未来を拓く先端科学技術」

■公開講座の目的

私たちの生活は科学技術によって支えられており、その進歩と密接な関係をもっています。特に日常生活に直接関係する機器や物質の目覚ましい発展と普及、情報技術の急速な進歩とそれにより得られる膨大な情報、生命の謎の解明と先端医療技術、これらに囲まれた私たちの日常生活を安全で豊かなものにするには、それにふさわしい教育と知識を備えることが必要です。このような環境の中、若い人たちから家庭の主婦ならびに学校教育を離れて久しい中高年の方々にいたる広い範囲で、科学的教養を積む機会を望む声が高まっています。大阪大学基礎工学部ではこのような声に応えるべく、あわせて従来とかく軽視されがちであった大学と地域社会との連帯を強めるとともに本学部の情報発信の一環として、1979年以来28回にわたり公開講座を開催してきました。

本年度（第29回）も、様々な立場から私たちの暮らしや社会と密接な関係を持ち、明るい未来を拓く最先端の科学技術の成果とその意義を紹介する企画を行います。

■期 間：平成19年8月6日(月)～9日(木)

■会 場：大阪大学基礎工学部 国際棟（シグマホール）

■受講料：無料

8月6日(月)

- 10:00～ 開講式
10:20～11:50 古くて新しい電気と磁気の不思議な関係
物性物理工学領域 ナノ量子物理講座 教 授 木村 剛
13:15～14:45 結晶のおいたち ー分子達の「右にならえ」ー
化学工学領域 環境・エネルギーシステム講座 准教授 佐藤 博
15:00～16:00 見学会

8月7日(火)

- 10:20～11:50 あいまいさの効用 ーファジ理論とその周辺ー
社会システム数理領域 システム数理講座 教 授 乾口 雅弘
13:00～14:30 計算機システムの設計を検証する
情報科学研究科 バイオネットワーク工学講座 准教授 濱口 清治
14:45～15:45 見学会

8月8日(水)

- 10:20～11:50 新しい電磁波領域の実用化を目指して
電子光科学領域 光エレクトロニクス講座 教 授 永妻 忠夫
13:00～14:30 モンジュの最適輸送問題をめぐる話題について
社会システム数理領域 数理計量ファイナンス講座 教 授 會田 茂樹
14:50～16:20 脳神経研究の最前線 ー生まれる前の脳の中で起こっているドラマー
生命機能研究科 脳神経工学講座 准教授 白崎 竜一

8月9日(木)

- 10:20～11:50 光エネルギーを利用する触媒反応 ー光触媒研究の最前線ー
太陽エネルギー化学研究センター 太陽エネルギー変換研究分野 准教授 池田 茂
13:00～14:30 古くて新しい乱流の話 ー乱流の統計法則と構造の接点を探るー
非線形力学領域 熱流体力学講座 教 授 河原 源太
14:45～15:45 見学会

■受 付 開 始：平成19年7月2日(月)から

■問い合わせ先：大阪大学基礎工学部研究科庶務係

〒560-8531 豊中市待兼山町1-3 TEL:06(6850)6131 FAX:06(6850)6151

E-mail: KISOKOU-S@star.jim.osaka-u.ac.jp URL: http://www.es.osaka-u.ac.jp

(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)

第10回適塾研究会 受講生募集

適塾記念会では、適塾顕彰事業の一環として緒方洪庵と塾生の足跡をたどり、適塾が果たしてきた歴史的役割を考察することを目的に、会員の方々を対象とした研究会を開講しております。

適塾についての理解を深めるとともに、会員の方々の親睦を深める良い機会になるこの研究会へ多数の方々がご参加くださるようご案内いたします。

1. テーマ 「適塾と語学」

適塾での勉学の基本は蘭書の解説を通して、当時わが国の近代化に必要とされた西欧文化を吸収・消化することにあった。塾生は学力に応じて各級に別れて毎月6回、文法や原書の解説に勤しんだ。その語学力こそ適塾の活力を支えるもととなった。この適塾の語学の意義をもう一度掘り下げて考察し、現代の語学教育を考える契機としたい。

2. 日 時
- | | | |
|-----|----------|-------------|
| 第1回 | 8月7日(火) | 18:00~20:00 |
| 第2回 | 9月4日(火) | |
| 第3回 | 10月2日(火) | |
| 第4回 | 11月6日(火) | 17:00~19:00 |

3. 会 場 大阪大学中之島センター 講義室2 大阪市北区中之島4丁目3番53号

4. 内容・講師等

第1回 [8月7日(火)]

「江戸時代の外国語研究と適塾の蘭学」

中 直一 (大阪大学教授)

「緒方洪庵の医学用語」

芝 哲夫 (大阪大学名誉教授)

第2回 [9月4日(火)]

「現代の英語教授法から見た適塾」

日野 信行 (大阪大学准教授)

第3回 [10月2日(火)]

「独学事始—洪庵の兄弟子・宇田川榕菴と洪庵門下生の市川斎宮—」

高橋 輝和 (岡山大学教授)

「宇田川榕菴の訳語と現代の化学用語」

芝 哲夫 (大阪大学名誉教授)

第4回 [11月6日(火)]

「蘭学塾の素読法と明治以降の語学教育」

中 直一 (大阪大学教授)

コーディネーター 芝 哲夫 大阪大学名誉教授 適塾記念会理事

中 直一 大阪大学大学院言語文化研究科教授 適塾記念会評議員

5. 対 象 本記念会会員 (新規加入の方を含みます。)

6. 定 員 50名 (定員になり次第締め切らせていただきます。)

7. 受講料 3,000円 (4回分)

8. 申込み方法 はがきに住所、氏名、電話番号をご記入の上、7月5日(木)までにお申し込み下さい。

受講者にはおって、ご案内と受講カードをお送りいたしますので、受講料を指定の銀行口座にお振り込みください。

お申し込み・お問い合わせ先 適塾記念会事務局

〒565-0871 吹田市山田丘1-1 大阪大学コンベンションセンター

電話：06-6877-9852

適塾ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp/jp/about/tekijuku/index.html>

(適塾記念会)

平成19年度大阪大学大学院言語文化研究科公開講座
公開講座「教員のための英語リフレッシュ講座」開催

日 時：平成19年8月6日(月)～9日(木)

会 場：大阪大学中之島センター (大阪市北区中之島4-3-53)

平成19年度の大学院言語文化研究科主催の公開講座を大阪大学中之島センターにおいて開催します。本講座は今回で6回目となり、例年、中・高の英語教員のほか小学校、大学の教員、大学院生など、英語教育に関心を持つ多くの方が近畿圏だけではなく中部、関東などからも参加しています。自治体教育委員会の教員研修のほか、類似の公開講座がかなり増えているにも関わらず、(パンフレット、研究科HP、雑誌『英語教育』『言語』でも広報したことから、)講義内容の充実が評価され、定員を超える応募があります。

各講師がそれぞれの専門的立場から、現場が直面する問題への考え方や対策のほか、IT時代の授業の魅力的な展開の仕方、生徒の理解を深め感動を与える文法や読解の授業のあり方などを、学術的な知見を踏まえ知的に啓発するとともに、教室で応用できる多彩な内容を講義します。運用英語についても最新の音声学の知見(発音生理のMRI動画)や授業で使える発音指導法を示した上で、2クラスに分けてネイティブの先生による実践訓練を行います。今年度は英語教員の専門的知識の能力開発をさらに充実させる目的で、従来の学習英文法に加え、認知文法、語法の講義、さらに小学校英語実践の講義を増やし、全体討議でも「小学校英語への現実的な対応」を扱います。このため、開講日が一日増えましたが、これは受講者のアンケートの要望と変革期にある英語教育の動向に応えるためです。

文責：本公開講座実施責任者 成田 一(言語文化教育論講座主任教授)

〈講師および演題〉8月6日(月)

- 10:00～12:30 「英語教育の方向と現代技術」 大阪大学大学院言語文化研究科教授 成田 一
- 13:20～14:50 「発音の科学：ダイナミックメカニズムと訓練」 同 上
- 15:00～16:30 「小学校での英語教育実践」 立命館小学校英語科アドバイザー 田録真弓

8月7日(火)

- 10:00～12:30 「英文法研究の英文法指導への応用」
大阪大学大学院言語文化研究科教授 岡田伸夫
- 13:20～14:50 「オーラルコミュニケーション実践授業(1)」
大阪大学大学院言語文化研究科教授 ジェリー・ヨコタ
大阪大学大学院言語文化研究科准教授 アンドリュー・村上スミス
- 15:00～16:30 「オーラルコミュニケーション実践授業(2)」
同 上

8月8日(水)

- 10:00～12:30 「ネット時代における国際英語の統合的実践」
大阪大学大学院言語文化研究科准教授 日野信行
- 13:20～14:50 「認知的な視点から見た英文法」 大阪外国語大学准教授 早瀬尚子
- 15:00～16:30 「英語の感覚を語法で養う」 関西学院大学大学院教授 八木克正

8月9日(木)

- 10:00～12:30 「アリスのことば学：「読み」への応用と実践」
大阪大学大学院言語文化研究科教授 沖田知子
- 13:20～14:50 「全体討議(質疑&トピック討論：小学校英語への現実的な対応)」
- 15:00～15:20 講座修了証書授与式 大阪大学大学院言語文化研究科長 金崎春幸
- 15:30～17:00 懇親会

〈定 員〉50名(先着順)

〈教材作成・連絡郵送費〉7,000円

〈参加申込み受付期間〉7月2日(月)～7月25日(水) [期限厳守]

〈問 い 合 わ せ 先〉大阪大学大学院言語文化研究科総務係 (TEL: 06-6850-5855 E-mail: genbunsoumu@ns.jim.osaka-u.ac.jp)
言語文化研究科ホームページ: <http://www.lang.osaka-u.ac.jp/>

(大学院言語文化研究科)

平成19年度大阪大学大学院言語文化研究科公開講座
「教員のための英語リフレッシュ講座」

日時：平成19年8月6日(月)、8月7日(火)、8月8日(水)、8月9日(木)
会場：大阪大学中之島センター

本講座は、平成19年度大阪大学大学院言語文化研究科公開講座として開催される。本講座は、英語教育の方向と現代技術、発音の科学、小学校での英語教育実践、英文法研究の英文法指導への応用、オーラルコミュニケーション実践授業、ネット時代における国際英語の統合的実践、認知的な視点から見た英文法、英語の感覚を語法で養う、アリスのことば学：「読み」への応用と実践、全体討議(質疑&トピック討論：小学校英語への現実的な対応)など、英語教育に関心を持つ多くの方が近畿圏だけではなく中部、関東などからも参加しています。自治体教育委員会の教員研修のほか、類似の公開講座がかなり増えているにも関わらず、(パンフレット、研究科HP、雑誌『英語教育』『言語』でも広報したことから、)講義内容の充実が評価され、定員を超える応募があります。

講師および演題

- 8月6日(月)
 - 10:00～12:30 「英語教育の方向と現代技術」 成田 一
 - 13:20～14:50 「発音の科学：ダイナミックメカニズムと訓練」 同 上
 - 15:00～16:30 「小学校での英語教育実践」 田録真弓
- 8月7日(火)
 - 10:00～12:30 「英文法研究の英文法指導への応用」 岡田伸夫
 - 13:20～14:50 「オーラルコミュニケーション実践授業(1)」 ジェリー・ヨコタ
 - 15:00～16:30 「オーラルコミュニケーション実践授業(2)」 アンドリュー・村上スミス
- 8月8日(水)
 - 10:00～12:30 「ネット時代における国際英語の統合的実践」 日野信行
 - 13:20～14:50 「認知的な視点から見た英文法」 早瀬尚子
 - 15:00～16:30 「英語の感覚を語法で養う」 八木克正
- 8月9日(木)
 - 10:00～12:30 「アリスのことば学：「読み」への応用と実践」 沖田知子
 - 13:20～14:50 「全体討議(質疑&トピック討論：小学校英語への現実的な対応)」
 - 15:00～15:20 講座修了証書授与式
 - 15:30～17:00 懇親会

旧制浪速高等学校本館及び同校尋常科建物の由緒銘板を設置

旧制浪速高等学校の本館であった現・共通教育本館（イ号館）の玄関及び同高等学校尋常科の建物であった現・共通教育物理学棟の玄関に、それぞれ建物の由緒を説明した銘板が設置されました。また、尋常科の玄関を飾っていたステンドグラスも綺麗に修復されました。

これらは、旧制浪速高等学校同窓会からの御寄付によるものです。



設置されたイ号館由緒銘板



物理学棟玄関のステンドグラス（上）と銘板（下）

（施設マネジメント委員会）

総合学術博物館修学館展示場8月オープン

待兼山のふもとの阪大坂に、総合学術博物館の修学館展示場が本年8月、リニューアルオープンします。



修学館展示場玄関（完成予想図）

常設展示室では、阪大の長い歴史の中で培われた研究精神や諸先輩の功績等を知ることができるとともに、最先端の研究にもふれることができます。企画展示室では、話題の研究の一端を掘り下げる展示や、地域の人々とのワークショップ等を実施します。「知」を軸に人・モノ・情報が出会い、交流し、新たな「知」の創造をめざすミュージアムです。また、テラスも楽しめるカフェやミュージアムショップも併設します。ぜひ一度、リニューアルした博物館に足をお運び下さい。



〈問い合わせ先〉総合学術博物館総務係 TEL：06-6850-6715

（総合学術博物館）

阪大生が行き交う街「石橋」

石橋商店街（石橋商業活性化協議会）
販促委員会委員長 堤 洋 一



阪急石橋駅を中心に広がる石橋商店街。今も下町情緒が残り、阪大の卒業生、教職員OBも懐かしむ街です。多くの学生や教職員が利用し、日頃からお世話になっている街でもあります。

地元の活性や地域貢献に力を注いでおられる石橋商店街の堤 洋一さんに、阪大生の今昔を伺いました。

■ どのようなお客さんが来られるのですか。

今年も多くの学生さんが入学され、3月から4月にかけては、親御さん達と歩く新入生の皆さんの姿がたくさん見受けられました。石橋は、買い物も便利で、飲食店も多く、学生のコンパや歓送迎会、阪大の先生方にもちょっと一杯と気軽に寄っていただける店が多いですね。

最近では、阪大の国際化の影響かもしれませんが、外国の方々にもよく利用していただいています。留学生や外国人の研究員の方々が家族連れで買い物にもよく来られます。

私は3代目なのですが、浪高当時の方々などが今も来られ、商店街を待ち合わせに利用されたりしているんですよ。阪大の皆さんに利用していただくことが商店街の活性化に繋がっていると思います。



石橋商店街でパン屋を営む堤さん（自店舗前にて）



旧制浪速高等学校時代の学生の様子（石橋駅踏切）

■ 学生の様子は昔と変わりましたか。

やはり、みんなお洒落になったような気がします。昔は、歩いているだけで阪大生とすぐにわかりましたが（笑）。

一緒にイベントの話などをするグループの学生さん達はとても格好いいですし、話される姿も活き活きとしています。大変元気ですね。大学祭などのイベントのシーズンになると学生さんも少しはにぎやかになりますが、昔から阪大の学生さん達のマナーはいい方だと思います。

こちらと一緒にいろいろなことをやりたいと思い、学生さん達に積極的に話しかけたいと思ってはいるのですが、なかなか糸口がなく、逆に気兼ねなく話しかけていただければと思っているんです。

■ まちおこしのアイデアはありますか。

身近なところでは、毎月18日、石橋商店街の各店舗が「これぞ」という「商品・サービス」を提供する「おはこ（十八番）市」と言う石橋商店街の商いのお祭りを開催しています。イベントでは阪大のいろいろな学生サークルの皆さんにも協力いただいています。

また商店街内に「クルルいしばし」と言うコミュニケーションスペースを設け、気軽に立ち寄っていただき、おはこ市をはじめ、商店街や池田市の情報などの提供を行っています。「クルルいしばし」を利用して、研究テーマである「地域社会」について勉強されている阪大の学生さん達もいます。

大型店舗の進出等で商店街もこれまでどおりでなく、様々な営業努力が必要です。石橋商店街はまだ恵まれていると言われますが、地域の皆様に喜んでいただける方策をみんなと一緒に考えていきたいと思っています。



タスキリレー 2007（阪大坂）



■ 今年は学生のイベント企画に協力いただいたとか。

「タスキリレー」は知り合いになった学生さんと話をし、盛り上がった企画なんです。学生さん達の勢いで企画もどんどん進んでいきました。商店街としてもいろいろなことを学生さん達とやってみたいと思っています。学園祭などにも協力させていただいて、何か一緒にできたらいいなとも思っています。この企画でも、賞品を提供させていただいたらすごく喜んでいただいて、一生懸命な学生さんを見ているとこちらも嬉しくなりますね。

また、大阪大学のプロジェクトである「待兼山デザインワークショップ」にも参加させてもらっています。

我々も大阪大学と一緒に何か取り組んでいると言うことがアピールできれば、それが商店街、地域の活性化にもつながると思っています。どんどん声をかけていただきたいと思います。学生さん達の元気をいただき、いろいろなアイデアに活かしていきたいと思っています。

<コメント>

商店街あつての阪大、阪大あつての商店街。お互いの気心が通じ合う、石橋はそんな気さくな街です。

石橋商店街 HP <http://www.ss-ishibashi.jp/>

世界に伸びる架け橋 — 海外教育研究センター —

海外拠点本部長 橋 本 日出男

21世紀は「知の時代」と言われています。大阪大学は、これまで“地域に生き世界に伸びる”をモットーに、地域社会や産業界と密接な連携を図り、高度な教育研究の展開とともに、独創的、先導的な様々なプログラムの導入を行いながら『世界最高水準の大学』を目指して現在に至っています。国際交流活動においても、優れた学術機関との交流協定に基づく交流活動をさらに活発化させ、留学生の受け入れ、本学学生の海外留学を積極的に推進しています。とりわけ、国際的な舞台において、世界の人々と堂々とやり合える能力を持ち、国際社会においてリーダーシップを発揮できる国際的な人材の育成に力点をしています。

この認識のもとに、大阪大学では、これまでも研究科・研究所ごとの海外における拠点を展開してきましたが、これらに加え、研究者の交流・学生交流のための情報収集・情報発信、海外における国際交流の支援、大阪大学の研究成果の広報、海外の研究成果の迅速な導入等の機能を持つ

全学的な拠点として、2004年にサンフランシスコセンター（アメリカ合衆国）を北米に、2005年にグローニンゲンセンター（オランダ王国）をヨーロッパに、2006年にバンコクセンター（タイ王国）を東南アジアに設置してきました。また、2006年4月には、それらを束ねる組織として海外拠点本部を置き、国際交流推進本部長がそのトップを兼ねています。

今後とも、研究者が、個々の分野での先導的、独創的な学術研究活動を展開し、国内にとどまらず世界に大きな影響を持つとともに、その活動を呼び水として優れた人材が集まり、諸外国から著名な研究者や優秀な若手研究者が、本学の研究者と相互に刺激を受けながら教育研究を行える魅力ある大学の創造を目指します。海外拠点が、「世界に伸びる架け橋」となり、日本の大阪大学から世界のOsaka Universityへの実現に向け、国際交流の更なる躍進をはかりたいと考えています。



グローニンゲン教育研究センター
Osaka University, Groningen Centre for Education and Research
Zernikelaan 6, 9747 AA Groningen, The Netherlands
e-mail: info@osaka-u-groningen.org
website: <http://www.osaka-u-groningen.org/>



バンコク教育研究センター
Osaka University, Bangkok Center for Education and Research
159 Serm-Mit Tower, 10th Fl., Room C, Sukhumvit (21) Rd.,
Klongtoey-Nua, Wattana, Bangkok, 10110 Thailand
e-mail: oubc02@ji-net.com



サンフランシスコ教育研究センター
Osaka University, San Francisco Center for Education and Research
120 Montgomery St., Suite 1270,
San Francisco, CA 94104 USA
e-mail: info@osaka-u-sf.org
website: <http://www.osaka-u-sf.org/>

■ サンフランシスコセンターは激動中

サンフランシスコ教育研究センター長 谷 本 親 伯

阪大がサンフランシスコに海外拠点設けることについて、日一日と自信を深めている。赴任に当たって、教育の重要性を強く強調してきた。「大学」の任務は、「知を創造」し、「知を伝達」し、そして、「知の発信」することにあることは論をまたない。



阪大は他の国立大学系、あるいは私立を含め、一早く海外拠点を設けた。(2004年4月)その特徴は、最先端研究情報や知財の交換だけでなく、国際人の教育にも重点を置いていることである。すなわち、「国際人」としての特別の資質を求めるのではなく、大学教育の所産としての教養と専門分野における考察力の向上を徹底するだけであるといっても過言ではない。あと必要なものは、情報と意思の交換を行う能力を備えることである。「人間力の向上」や「指導者的能力」は、必然的な結果であると考えている。筆者は30年余、教職に就いてきた。勿論、研究活動も求められてきた。一番意識してきたことは、自分で考える力を磨き、論理的な表現が出来ることである。英語での表現は、日本語よりも単純であっても、常に論理的な構文が求められる。日本人の多くが英作文に苦手意識を持つのは、「曖昧」な表現に慣れてきたからである。理工系に先ず求められる英語力は、簡潔さと明瞭さである。正確に伝達する能力を問われているのであって、「外国語」を理解することではない。情報伝達手段としての英語が不可欠である。日本人全般に国際共通語としての英語での伝達能力の足りなさを重大に考えてこなかったことが重大な問題である。

これに対し、工学英語の延長線上で、米国に西海岸を中心とする「語学研修」を実施し、今年で5年目を迎える。阪大としては、例えば、TOEFL iBTで最低68点(CBT 190点、PBT 520点)を要求するとか、これからの教授に対し、必要が発生すれば、即、講義を英語に切り換える能力が求められている。

また、阪大独自の国際インターンシップの提供も理工系やロースクール教育の中で発展しつつある。同窓会組織もこれを支援する気運になってきた。

NAFSA2007(ミネアポリス市 参加者2,100名。この中、米国以外から300名。)においても、エラスムス・スミンドスの原型となったIAESTE/UNESCOの活動が、Short-Term Experiential Programs for Engineering Studentsの典型として取り挙げられた。

実は、阪大関係者がこの組織の中心を担い、筆者は国際組織のBoard Member(2003-2007)を務めた。今、IAESTE USAと連携して、シリコンバレーでのインターンシップの機会を設けつつある。

さらに、当地に拠点を設けた7つの大学および教育研究行政機関の間で、情報交換や共同の活動を目的とするJUNBA(Japanese University Network in Bay Area)の中心が当センターである。一般にも公開して、講演会を開催している。一番最近の講演(5月9日)題目は、「シリコンバレーと頭脳循環：インド人と中国人のネットワークからの示唆」であった。日本人の弱点を様々な立場から討議した。タンクローリー炎上による落橋事故に対しても、副知事の要請を受け、国際協力的一端を担うべく、日本の某大企業の社長に直接コンタクトを取ることもしている。ここに初めて明かす動きである。

地球環境の保全についても、やっと動き始めた米国の中心が、カルフォルニアになりつつある動向も感じている。理系と文系の融合教育や今までにないカリキュラムの検討も視野に入れている。E-Learning(遠隔授業)も当センターのルーチン業務として定着した。今年度前期の話題は次の通りである。

- ・谷本 親伯：サンフランシスコ教育研究センター
「世界遺産の保存：スフィンクスから敦煌莫高窟まで」
- ・竹田 誠之：日本学術振興会サンフランシスコ研究連絡センター長
「ビッグサイエンスと国際協働—すべては霧から始まった」
- ・中川 淳子：SFラジオ毎日・北米毎日新聞社・社長
「ラジオ放送と新聞—言葉の不思議」
- ・下田 範幸：日本およびカルフォルニア州弁護士
「チャレンジのすすめ」
- ・堀淵 清治：Viz Media, Founder/ Co-Chairman
「アメリカの若者文化における」ポップカルチャーの影響」
- ・松浦 功：Bank of The West 取締役顧問
「私の留学経験：ステーキとお寿司、国際金融情報」
- ・榎本 博之：B-Bridge International 社長
「新天地の醍醐味—ベンチャー企業を起こして」



当センターは、今激しく動いている。サンフランシスコ市の金融街の中心にあり、地下鉄BARTのモンゴメリー駅からたった2分の場所にある。適宜、報告に努力したい。乞う、御期待。

たにもと・ちかおさ

西松建設株式会社土木設計部主任技師、京都大学工学部助手、同講師、同助教授、UCバークレー客員研究員、大阪大学大学院工学研究科教授等を経て、2007年4月よりサンフランシスコ教育研究センター長。

プロフィール

■ 400 年と 150 年、12 時間と一瞬

グローニンゲン教育研究センター長 藤 原 守

「大阪大学がグローニンゲンにヨーロッパ教育研究センターを置いた理由は？」との質問が、いろいろな人から来ます。グローニンゲン大学とはこれまで長い付き合いと歴史があり、センター設立に際しても大きな支援の申し出もあり、問題解決と協力の手を互いに握れるとの確信の下に、拠点作りが始まっています。大阪大学の歴史は、適塾の医学から始まっていますが、1870 年代の適塾での講師はグローニンゲン大学を卒業した 2 人の医学者、ボードウィンとエルメレンスが務め、教育面でも歴史的な交流がありました。この 150 年前の交流は、年単位の時間が必要でした。

グローニンゲン市へは関西国際空港から 12 時間かけてアムステルダム・スキポール空港に到着し、列車で 2 時間 40 分の距離です。関空から大阪大学に到着するのは、電車を乗り換えて約 2 時間かかります。フランスのエコール・ポリテクニクに到着する場合でもシャルル・ドゴール空港から約 1 時間半かかることを思えば、グローニンゲンはそんなに田舎ではないのです。ヨーロッパとの交流は、150 年前に比べて 1 日単位に短縮されたということです。



グローニンゲン大学

インターネットが大きな変革をもたらしています。インターネットは 30 年程度前に、原子核物理研究のために欧州原子核機構（CERN）で開発されたものですが、計算能力の億倍のスピードアップで磨きがかかり、現在に至っています。世界への通信費は、ほとんど無料のように安くなり、TV 会談も簡単に出来る世の中です。秒単位の交流時間となっている今、離れたヨーロッパでなぜいまさら拠点をという疑問は当然です。

情報の急激な膨張とともに、情報ゴミが溢れた情報砂漠が生まれつつあります。この溢れる情報を知識に変え、知識を適切に使うための「知恵」を付ける必要があります。このためには、世界のグローバル化に対応した教育研究の国際化を図り、世界をリードできる人材の育成をする必要があるとの世界的共通認識があります。これは、大阪大学

の海外拠点の存在理由の一つです。ヨーロッパの大学との直接的な対話から、価値ある知識とそれを用いて研究する。また、溢れる情報の中から、研ぎ澄まされた知恵を得るといのが教育の価値と考えられています。そのため、国際的研究環境を生むための研究者交流、ヨーロッパの大学での豊かな留学経験を積み、日本が世界をリードしていくようにするのは、我々の未来への課題と言えます。

グローニンゲン教育研究センターは、平成 17 年度に発足しました。グローニンゲン大学との毎年わたる大学首脳陣レベルの交流検討で、両大学との信頼関係は、さらに強化されつつあります。これまでの本格的交流開始から、

1. 経済学を中心にした大阪大学フォーラムの開催
2. 文系学生の夏休みを利用した短期留学の実現
3. グローニンゲン大学からの短期留学の実現
4. 研究者交流の活発化、本学卒業生の情報ハブとしての役割強化
5. 文学部のヨーロッパ・エラスムス・ムンドス計画への参加決定
6. 理学部物理（物理、宇宙物理）のエラスムス・ムンドス・マスタープログラムへの参加、インターナショナル・トレーニング・プログラムへの取り組み
7. IT 関連研究におけるエラスムス・ムンドス計画への参加
8. 7 時間の時間差を利用した、基礎科学教育 TV 授業カリキュラム化
9. 大阪〔関西〕を中心としたオランダ北部地区との共同開発提案

などが計画され、徐々に実行に移されて行きつつあります。まだ、取り組むべき課題は多く、たとえば、学生からの幅広い要望に応じて短期留学をヨーロッパのいろいろな大学に拡大する必要もあります。また反対に、ヨーロッパの大学からの短期留学を受け入れて、日本や大阪を知ってもらおうということも大事です。

2009 年は、徳川家康がオランダ政府に対して朱印状を渡し、政府レベルでの交流が開始された 400 周年です。各方面で、オランダ・日本、ヨーロッパ・アジアの交流を活発化させ、日本をゲートウェイとしての役割を持たせましょう、との動きがあります。これに関しては、ヨーロッパ全体、アジア全体に対してのアカデミズム・レベルからの働きかけが行えると考えています。

溢れる情報を整理整頓し、実りある知識をフィルターにかけ、知識からさらに価値ある知識を生み出す。こういった「知恵」を付けるためには、国際的な場で、信頼関係の上に成り立つ日常的対話が必要です。日蘭交流 400 年のスケールに比べれば、大阪大学の海外拠点活動は新たな一歩を踏み出した時点です。関係者の皆様方の、ご理解とご協力をお願いいたします。

ふじわら・まもる

大阪大学核物理研究センター助手、助教授、日本原子力研究所先端基礎研究センター・グループリーダー（兼任）等を経て、2007 年 4 月よりグローニンゲン教育研究センター長、核物理研究センター准教授（併任）。

プロフィール

■ バンコクセンターに着任して

バンコク教育研究センター長 関 達 治

早い赴任をとのことで、持参するものも定まらぬまま4月5日にバンコク教育研究センターに、宮本和久前センター長の後任として赴任しました。今、タイは酷暑のさなかです。着任早々には、タイの正月といわれます釈迦の誕生を祝うソンクラーン（水を掛け合う祭り）があり、5連休となりました。祭日の中身は日本とは異なるのですが、4月、5月には祝日が多く、何となく日本の雰囲気似ています。



バンコクセンターは、昨秋、本学の三つ目の海外教育研究センターとして、正式に発足しました。バンコクのチャオプラヤ（川）のほとりにあるシェラトンホテルにおいて、宮原総長、橋本理事はじめ諸部局からの先生方の参加のもと、開所式典、同窓会を兼ねた祝賀パーティー、また大阪大学セミナーが開催されましたことは、まだ記憶に新しいところです。併せて、学術交流協定を、従来のチュラロンコン大学とマヒドン大学に加えて、タマサート大学、カセサート大学、キンモンクット工科大学（トンプリ）と締結し、バンコクにおける主要大学との協力強化が可能となりました。

タイにおいては、本センター設置以前から、2002年に生物工学国際交流センターがマヒドン大学理学部に「海外共同研究拠点」を設置し、ユネスコ・バイオテクノロジー研修講座の実施や、科学技術振興調整費によるタイとの共同研究を実施しています。更には2005年には微生物病研究所が中心となりタイ王国保健省医科学局の国立予防衛生研究所内に「タイ感染症共同研究センター」（大阪大学感染症国際研究拠点）を設置し、国家プロジェクトとして新興・再興感染症研究拠点形成プログラムを実施されています。このような実績は、バンコクセンターを運営する上で大きな支えとなっています。

バンコクセンターは、他の2拠点とは少し異なり、本学への留学生招致活動が一つの活動となると考えています。本学の留学生の多くはアジアからの学生であり、その中でも東南アジアからは、中国、韓国に次いで多くの留学生が来ています。バンコクセンターでは、タイのみならず東南アジアにおいて本学の活動を紹介し、優れた学生を招致できればと考えています。また、本学の学生の留学などの支援も行います。今年の夏休みには、文学、法学、経済学、人間科学の各学部・研究科と言語文化研究科とが共同で「英語研修プログラム」をマヒドン大学インターナショナルカレッジの協力を得て実施しますが、その中で、本学卒業生による特別講義やタイ同窓会による小宴を予定しています。

10月からは、いよいよ大阪外国語大学との統合が実施されます。同大学は、その特性からもアジアとの関係が深いと聞いておりますので、バンコクセンターの活用についても検討したいと考えています。特にタイ同窓会については、

同大学の卒業生をも含めた組織への移行を相談しているところです。うれしいニュースとしては、大阪大学タイ同窓会の事務局長をお願いしている Pornchai Yongwattanasoontorn 氏（昭和59年工学部修士課程修了）が勤務する三洋半導体タイランドが、5月15日にタイ王国「最優秀企業総理大臣賞」を、スラユット・チュラーノン総理大臣から受けました。ポンチャイ氏は、この表彰にかかる企業活動に大きく貢献しており総理大臣から盾を授与されました。（写真右はスラユット首相、左がポンチャイ氏）



さて、バンコクセンターの設置が無駄遣いにならないためには、皆様のセンター利用が必要であります。そのためには、

- ①各種の競争的教育研究資金の申請時に、国際活動拠点として各センターの利用を組み込んでください。
- ②現地に来られたら必ず立ち寄ってください。事務所ではインターネットの接続、印刷、コピーなどのご要望にお答えします。ホテルでのプリンター貸し出し配達サービスなども可能です。
- ③ホテル予約、訪問先アレンジ、代理交渉などいかなることも先ずはご相談ください。
- ④留学生招へいのための面接、試験などにもご利用ください。
- ⑤派遣学生については、必ず連絡をさせてください。リスク管理も含めてお手伝いいたします。それでは皆様のご利用をお待ちしています。



スカイトレイン（BST）及び地下鉄のアソーク駅から徒歩5分のところにセンターがあります。

せき・たつじ

大阪大学工学部助手、生物工学国際交流センター助教授、同教授、同センター長等を経て、2007年4月よりバンコク教育研究センター長。

プロフィール

グルノーブル大学連合（フランス）

Consortium of Universities in Grenoble



フランス第2の都市、リヨンから鉄道でほぼ1時間。イゼール川沿いに開かれたグルノーブルは、ローマ時代からの歴史が刻まれた人口15万の中規模都市です。自動車を使えば1時間もかからず世界水準のスキー場へとアクセスできるマウンテンスポーツのメッカでもあります。1968年にはこの地で冬季オリンピックが開催され、その模様はクロード・ルルーシュ監督によって「白い恋人たち（原題：13 Jours en France）」という作品にまとめられています。

このグルノーブルに位置するジョセフ・フーリエ大学、ピエール・マンデス・フランス大学、スタンダール大学、グルノーブル理工科大学の4大学から成るコンソーシアム（連合体）がグルノーブル大学連合です。これらの大学キャンパスは市の東郊に集中して大学区を形成しており、完備された学生寮はかつ

てのオリンピック選手村が転用されているとのことです。緑豊かなキャンパスと市の中心部や鉄道駅とは3分から5分の間隔で頻繁に運行されるトラムによって結ばれており、カジュアルな服装の学生たちがトラムを占領しています。

1996年、当時の橋本首相とフランス・シラク大統領との間で、「21世紀に向けての日仏協力20の措置」という取り決めが交わされましたが、その中の第8項目（人物交流の増大）に基づき、1998年に「プログラム8」という日仏の大学生を対象とした交流事業が始まりました。大阪大学もこの一環として、グルノーブル大学連合を含む二つのフランス・コンソーシアムとの間で協定を結び、2000年度以降、グルノーブルとの間で活発な学生交流を進めています。

特色を持った中規模の大学が緩い連合を組んで、個々の持ち味を活かして大規模大学に劣らない総合力を発揮しているのが、グルノーブル大学連合です。また大学以外にも世界規模の研究施設が集中するグルノーブルは、ヨーロッパや世界の一流研究者が交錯する場ともなっており、レジャーに勉強に、学生生活を送るには最適な地です。もちろん授業はフランス語が基本ですが、フランス語に自信のない交換留学生向けに、第1セメスターにフランス語を集中的に勉強し、第2セメスターには興味のある授業をフランス人の級友たちと勉強する、というプログラム GUEST が用意されています。

〈グルノーブル大学連合〉 <http://www.grenoble-universites.fr/>



グルノーブル理工科大学（図書館）



グルノーブル市の様子

競技かるた会

「畳の上のスポーツ」

競技かるたは小倉百人一首を使って行う頭脳スポーツです。読まれた札をいかに速く取るか、という一点を追求して、私たちは毎日畳の上で汗を流しています。

読まれた札を取る。一見単純なようですが、音を聞き分ける聴力、鋭敏な反射神経、最高速度で札に到達するための筋力、更には戦略を立てるための頭脳までもが必要とされる競技です。総合的なレベルアップを目指すためには、自分に欠如あるいは突出している能力が何なのかを知り、それぞれ自分の課題を持って練習に取り組むことが必要となってきます。

創部7年目、会としての歴史はまだ浅いですが、着々と実績を積んできました。昨年度は大学競技かるたの頂点を決する全日本大学選手権の団体戦において、総合3位と悲願の初メダルを獲得しました。また、団体戦の天王山・全国職域学生かるた大会では、最上級リーグであるAリーグにおいて、東京大学、立命館大学、暁星学園ら並み居る強豪を制し、春夏連続の準優勝を成し遂げました。このほか、個人戦でも多くの大会で優勝者・入賞者を輩出しています。

お正月シーズンには、吹田市や豊中市で催されるかるたイベントのお手伝いをしながら、積極的に地域との交流を



深めています。かるたに興味を持ち、私たちの説明に熱心に聞き入る子どもたちを見ていると、この中から将来の名人・クイーンが誕生するのではという期待に胸が膨らみます。

部長 服部 夢彦(工・3年)

〈コメント〉

20人ほどの少人数のサークルですが、みんなで楽しくわいわい練習しています。



練習場所：月、水、金 学生会館（豊中キャンパス）和室
池田カトリック教会

練習日時：平日

部員数：23人

連絡先：会長 服部夢彦

1.05-h.yumehiko@ezweb.ne.jp

URL：http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Lounge/7716/

編集後記

6月4日に行われた総長選考第2次意向投票及び総長選考会議で、驚田清一理事・副学長が総長候補者として選出されました。「阪大初の文科系総長」ということで、翌日の新聞各紙にも大きく取り上げられました。今月号ではトピックスとキャンパスニュースで総長選考の様子や結果について掲載しましたが、次号（8月号）では、新総長の特集ページを設ける予定です。また、10月号では大阪外国語大学との統合について大きく取り上げる予定です。これからの「阪大スタイル」が掲載される次号以降もご注目下さい。

（瀬尾）

「叡知を求めて!大学から実業界へ、実業界から大学へ」

オープン・ファカルティー・センター (OFC)

大学院経済学研究科 教授 三 野 和 雄
(OFC 運営委員)

パラダイムの変革を必要とする時代の到来を迎え、新たな価値創造に向け、多様な次元での交流・連携が、今、必要とされています。大学に対してもまた、交流・連携の実をあげるべく、社会貢献が、今、求められています。

オープン・ファカルティー・センター (以下、OFC) は、「開かれた人材・学術交流の中核的な場としての大学」をテーマに平成 10 年に実施された大阪大学経済学部 50 周年記念事業基金をもとに設立されました。経済学研究科・経済学部を基点に、国内外を問わず、産業界・企業・行政・地域・同窓会・一般社会人を母体とする多彩な人材の交流と参加を実現するための「場」ないし「結節点」としての役割を担っています。

■ OFCの活動

大阪大学大学院経済学研究科内に設置された「オープン・ファカルティー・センター (OFC) 運営委員会」の企画のもと、企業・行政・地域との交流・連携・相互啓発に有意義と思われる様々なイベントやプロジェクトを実施しています。

また、それらの活動の成果を社会と分かち合うため、インターネット上に「OFC ウェブサイト」を設け、「OFC ニュースレター」を発行し、イベントないしプロジェクトの内容によっては、随時、講義録・講演録などを編集するなど、積極的な情報発信を行い、円滑な交流・相互啓発の実施とその成果の普及に努めています。

OFC が、これまでに実施してきた活動には、次のようなものがあります。

【大学から実業界へ】

本学経済学研究科教員による一連の「OFC 講演会」の開催

【実業界から大学へ】

- (1) 松下電器産業株式会社のご協力によるシンポジウムの開催
- (2) ダイキン工業株式会社のご協力による公開講義の実施 (平成 14 年度後期)
- (3) 経営学者・シンクタンク研究員による公開講義の実施 (平成 16 年度後期)
- (4) 実業界・官庁で活躍の方々を講師とする公開講義の実施 (平成 17・18 年度後期)
- (5) 外部講師招聘による講演会の開催
- (6) 衛星放送による企業トップの公開講義の実施 (4 大学連携・平成 15 年度後期)

OFC はまた、先のキャッチフレーズのもと、大学と実業界との相互交流のための情報手段の重要性に鑑み、OFC 活動とそれに伴う成果を公表するため、OFC Newsletter を発行し皆様に読んでいただくと同時に、公開講義等については講演録を編集し頒布しております。また、これらの内容をホームページ上に公開するよう努めています。

ホームページをご覧ください。

<http://www2.econ.osaka-u.ac.jp/ofc/>

みの・かずお

プロフィール

昭和 24 年生まれ。関西学院大学経済学部卒業後、ブラウン大学経済学研究科 (PhD)。東北大学経済学部教授、神戸大学経済学部教授を経て、2004 年 4 月から現職。専門はマクロ経済学



阪大 NOW No.97 2007 6月号

2007年6月20日発行

編集・発行 大阪大学総務部評価・広報課 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1

TEL: 06 (6879) 7017 FAX: 06 (6879) 7166

ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。

E-mail: souhyokoukohou@ns.jim.osaka-u.ac.jp